

アルゼンチンは招く

ミシオーネス州と日本人

世界日本海外協会連合会



海協連在外支部アドレス

314466
2/1

フロン支部

Junzo Furuta
AV. Casilho Franca 140,
Caixa Postal 421,
Belém Pará,
BRASIL (電略 KAIKYO BELEM)

フロン支部 マナオス事務所

Masatoshi Takamura
Rua das Andradas, 354,
Manaus Amazonas,
BRASIL

フロン支部 モンテ・アレグレ試験農場

Jiro Izeki
Monte Alegre, Pará,
BRASIL

ト・ヂ・ジャネイロ支部

Akira Otani
a/c Embaixada do Japão,
Rua das Laranjeiras, 192,
Rio de Janeiro,
BRASIL

文部レシーフ事務所

Shinzo Ohama
Rua Santa Rita
Recife, Pernambuco
BRASIL

パウロ支部

Daisaku Osawa
a/c Consulado Geral
Praça Dom José
São Paulo,
BRASIL

パウロ支部 ポルト・アレグレ事務所

Shigeichi Sugitani
Rua Caldas Junior, No.328, 1ª and,
Porto Alegre,
Rio Grande do Sul,
BRASIL

パラグアイ支部

Go Hioki
Casilla de Correo No.31,
Encarnación,
PARAGUAY
(電略 ENCARNACION GO HIOKI)

ボリビア支部

Yasuo Wakatsuki
Casilla No.461,
No.385, Calle Bolivar,
Santa Cruz,
BOLIVIA

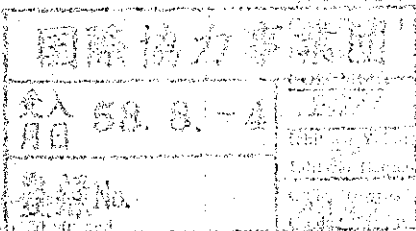
(電略 COPANESA SANTA CRUZ)

アルゼンティン支部

Kyobei Katayama
a/c Cooperativa de Colonizacion
Argentina LTDA.,
Hipolito Yrigoyen Buenos Aires,
ARGENTINA

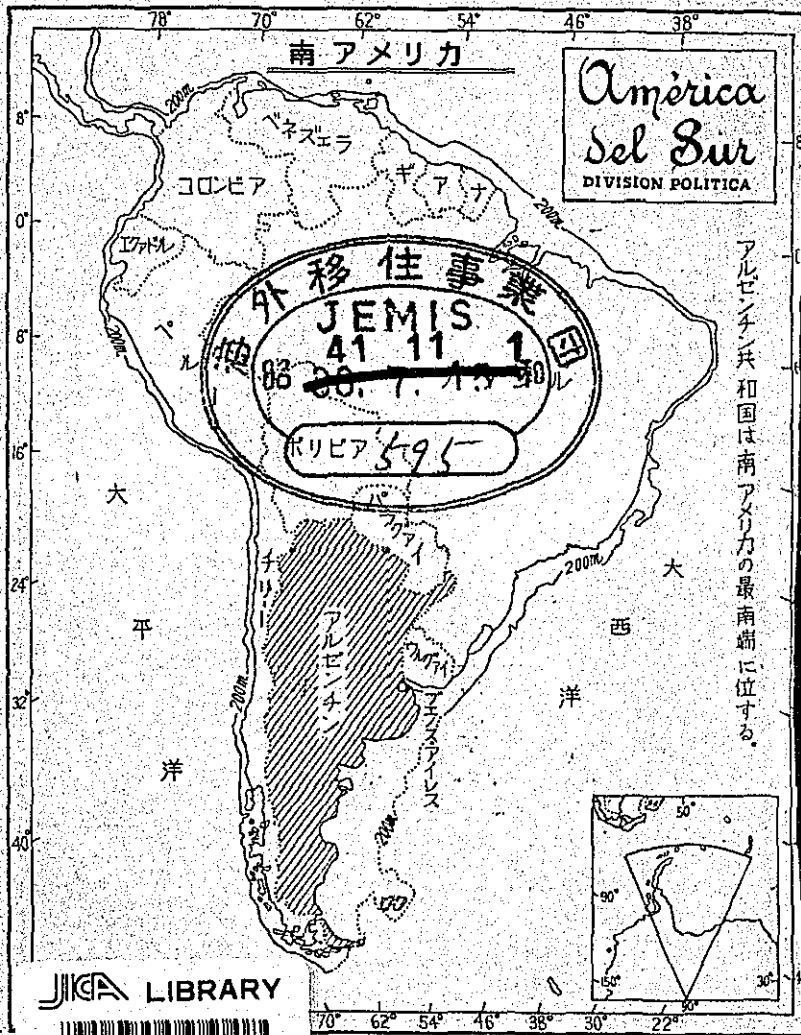
コロンビア支部

Sukeaki Tomiya



BRASIL - ARGENTINA

Hajime Takabashi
c/o Consulate-General of Japan,
346, California street,
San Francisco 4,
California,
U. S. A.



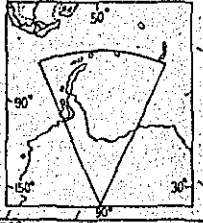
78° 70° 62° 54° 46° 38°

8°
0°
8°
16°
24°
32°
40°

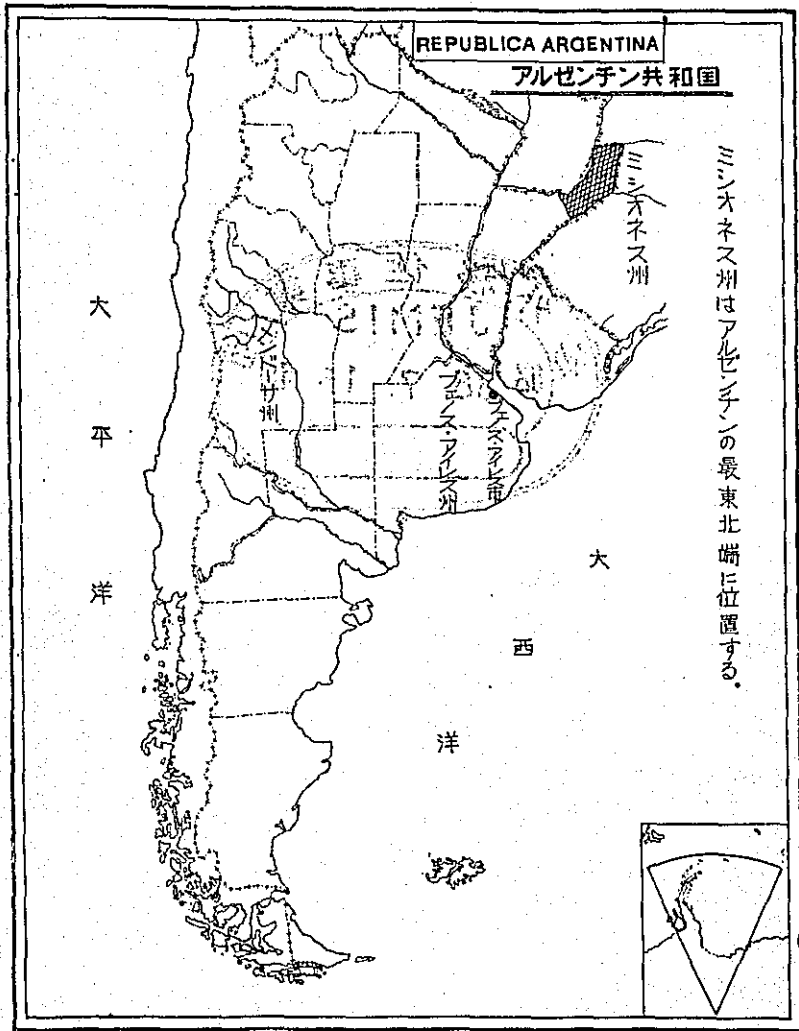
ベネズエラ
コロンビア
エクアドル
ペルー
チリ
アルゼンチン
パラグアイ
ウルグアイ
ブラジル
ガイアナ
スリナム
フランス領ギアナ

移住事業団
JEMIS
41 11 1
88 00. 7. 13 90
PRIBIA 595

大西洋
太平洋



70° 62° 54° 46° 38° 30° 22°

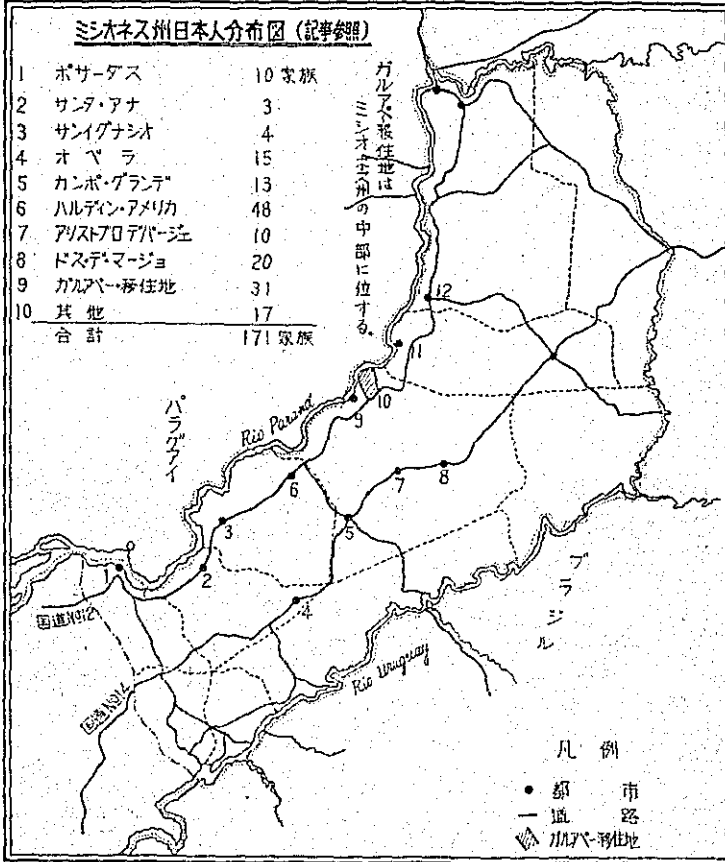


ミシオネス州はアルゼンチンの最東北端に位置する。

ミシオネス州日本人分布図（記事参照）

1	ボサーダス	10 家族
2	サンタ・アナ	3
3	サンイグナシオ	4
4	オペラ	15
5	カンボ・グランテ	13
6	ハルティン・アメリカ	48
7	アリストプロデバージュ	10
8	ドステ・マージュ	20
9	カルアベ・移住地	31
10	其他	17
合計		171 家族

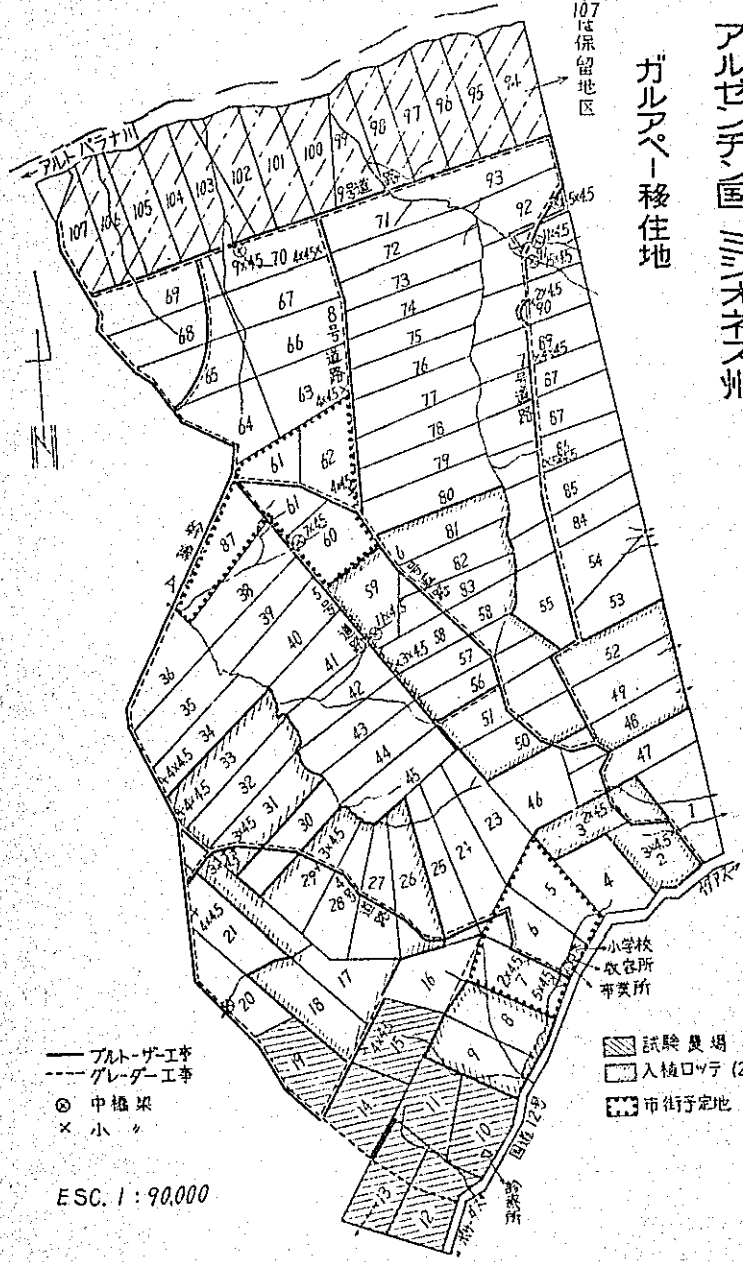
カルアベ移住地は
ミシオネス州の
中部に位する。



アルゼンチン国 ミシオネス州

ガルペー移住地

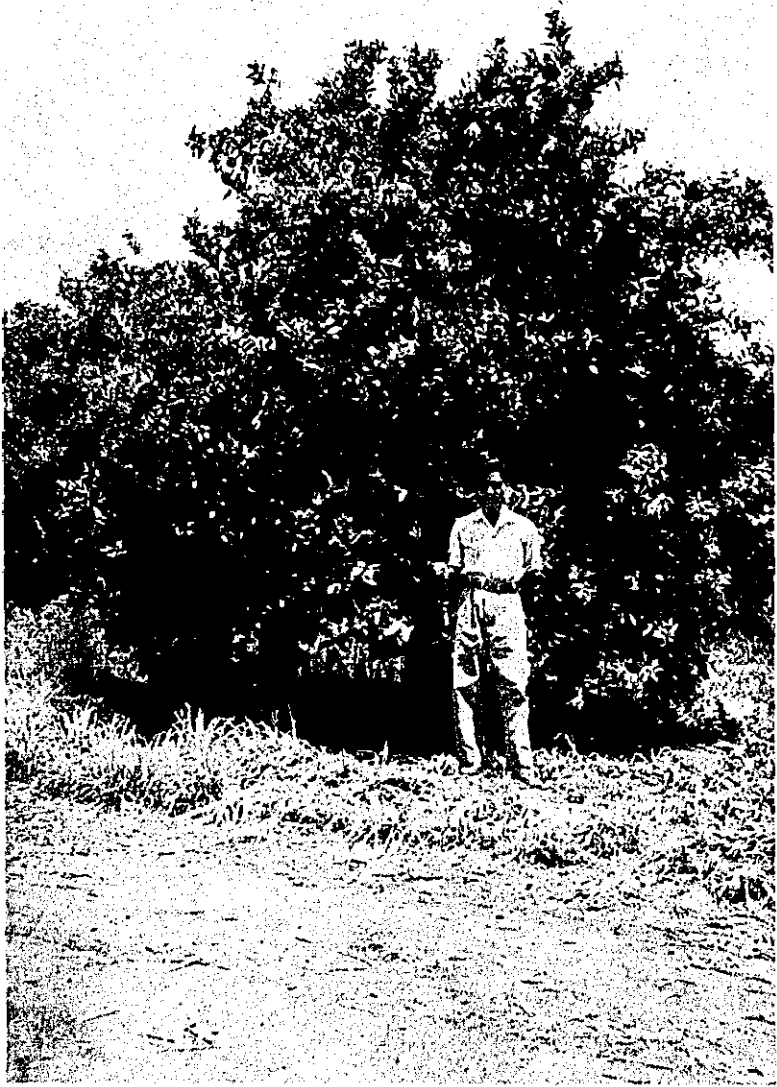
94-107は保留地区



- フルトーザ工事
- - - グレーダー工事
- ⊙ 中橋梁
- × 小橋

- ▨ 試験農場
- ▩ 入植ロット (26)
- ⊞ 市街予定地

ESC. 1 : 90,000



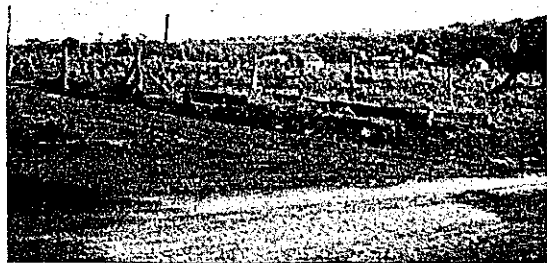
坂田柑橋圃、8年樹のオレンジの生育状況、一本当り1,000個、多い木は1,500個も結実する。人物は坂田徳治氏長男幸男君（身長1米63厘）



(写真上) ホサーダスからガルアヘー移住地へ通ずる国道沿いの景色
(写真下) ホサーダスから65kmの地点にある歴史上有名なヘスイーク教徒伝導の遺跡



(写真左)



国道から見たガルア
ヘー試験農場の一部

(写真左)



国道からガルアヘー移
住地へはいる分岐点

(写真左)



ガルアヘー移住地の仮収容所
右手に見えるのは事務所



(写真上) この移住者は食糧確保のために先ずトモロコシをつくつた



(写真上) 原始林を伐採し、そのうち有用材はトラックで搬出する



(写真上) 移住者は先ず仮収容所に到着く。ここから新生活への第一歩がはじまるのだ。



(写真下) 移住者の最初の仕事は伐採、山鹿、開墾である。



(写真上) 自分で建てた仮小屋の庭につくられた野菜畑。

(写真下) 広い農場に植えられたゼルバ・マテ茶は今年で一年目。



発刊のことば

アルゼンチンには現在一万数千人の日系人が在住している。これらの人達の最大の希望は日本から移住者が一人でも多く来てくれることであるといつても過言ではない。この希望を反映してできたのがアルゼンチン拓植協同組合であつた。

このアルゼンチン拓植協同組合の方々が日本の人達に少しでも同国の事情や特に日系人の活躍の舞台であるミシオオーネス州の模様、戦後最初の移住地であるガルチペー移住地の実態等を理解してもらいたいというので筆をとられ纏められたものが本書である。

これから、アルゼンチンへの移住がますますさかんにならうとしている際、本書が同国への移住を推進する上に少しでもお役にたつならばこれに過ぎない。

一九六〇年八月一日

財団法人 日本海外協会連合会

国際協力事業団

受入 月日 '84. 8. 10	701
登録No. 02847	20
	EA

目次

序に代えて.....	外務省移住局長
● アルゼンチンとはどんな国か.....	七
● アルゼンチンの人のこと.....	二
● ミシオーネス州の概要.....	一四
● ミシオーネス州に於ける邦人発展の模様.....	三〇
● ミシオーネス州の産業の大要.....	三三
● ミシオーネス州の植林事業について.....	三五
● ミシオーネス州で日本茶を栽培して.....	三七
● 主なる間作物について.....	三九
● 坂田柑橘園を祝る.....	七
● 四百家族入国許可の経過について.....	八一
● ガルアペー移住地の現状.....	八六
● ガルアペー移住地営農のすすめ方.....	九〇
● ガルアペー移住地の実態アンケート.....	九六

ブエノス・アイレス入港からミシオトネス向け出発まで	一〇八
移住者家族に同行して	一一三
戦後来亜した実習生の手記	一一六
メンドーサ州に於ける果樹類の栽培状況	一二三
亜国生活満一年を終えて	一二七
メンドーサ市郊外ウベルティニ農場満一年	一四一
編集のあとに	一四四

序に代えて

アルゼンチン拓殖協同組合は、私が在アルゼンチン日本大使館在勤中に、在華同胞有志が日本の移住政策に協力するために、献身的に結成されたものであります。

今回、私ははからずも移住局長の職につき、再び当協同組合と關係をもつに到つたことは、誠に深い御縁と思ふ次第であります。

当組合は結成以來、組合員が手弁当でよく日本の移住推進に協力してこられた事は、私の親しく承知して深く敬意を表している処であります。

特に昭和三十二年一月、組合が日本人のアルゼンチンへの移住のために、五カ年間、四百家族の農業移住入国許可を同國政府から取付けられたことは、銘記すべきことであります。

その年の七月、日本海外移住振興株式会社は、ミシオーネス州に三千百ヘクタールの土地を買い、組合が取りつけた入国許可による移住者を、ここに入植させることとなつたのであります。

八十家族を入植せしめる計画であります、現在僅かに二十六家族百三十九人が入植しているに過ぎない次第であります。

これは組合の御努力と熱意に対して誠に申しわけない次第で、我々としましては今後凡ゆる

困難を克服して一日も早く早く満積にせしむる様努め度いと思っている次第であります。

幸に昭和三十五年度からは移住者に対する船賃貸付条件の大幅な緩和や、仕度金の支給等ができることになり、受入施設の強化等についても相当の改善を見ましたので、今後移住についての宣伝啓発を倍加して国策としての移住推進に邁進いたしたいと念願しています。

今般、冊子「アルゼンチンは招く」を發刊するに当り、一言御挨拶を申上げる次第であります。

外務省移住局長 高木 広一

アルゼンチンはどんな国か

位 置

日本と丁度地球の反対側で南緯二二度から五五度にわたって南米大陸の南端に所在する南米第二の大国である。国の北端は、ボリビア、パラグアイの両国に境し、北東はブラジルの一部及びウルグアイ国、西はアンデス山脈を境にチリ一國に接している。東及び東南は、太平洋に面している。

面積及び人口

約二百八十万平方哩で日本の約八倍である。人口は日本の四分の一にも満たない僅か二千万人である。

地勢及び氣候

國の西方チリ一との國境を南北に走っているアンデスの高峯、山脈地帯を徐いては、ところどころ多少の起伏があるが、概ね平坦で南部に行くにしたがって低くなっている。源をブラジルに発しているラ・プラタの大河は、北より南に緩く流れ、兩岸の大平原を灌溉しつつ大西洋に注いでいる。その河口に首都ブエノス・アイレス市がある。

日本に於ては、アルゼンチンが南米大陸の南部だから暑い國だと思ふ人が多いようだが、南

半球は南に行くほど寒いのであって、ブエノス・アイレス州以北の地方は北に行くほど暑く、アルゼンチン國の最北部は亜熱帯である。中央部は温帯で、國の南端は寒帯である。一般のを見て大陸性で変化が烈しいが、寒暑ともに長く続くようなことは稀れで、住み好い氣候である。

産物

世界有数の大牧畜國であつて、その家畜の数は人口の十数倍である。主としてパンパの大草原地帯から南方地方に於て、牛、馬、羊、豚の大群が牧養されている。

農産物は小麦が第一でカナダに次ぐ良質で知られ、その輸出量は世界の第二位を占めている。トウモロコシ、亜麻仁などは國の中心を占める肥沃な農業地帯において莫大な數量が生産される。北部のチャコ地方は、綿花、ケブラッチョ材、ケブラッチョエキスの産出で有名、また北部のサルタ、フイの兩州は、砂糖、煙草、柑橘類及び石油、鉛、亜鉛等の鉱物が産出され、西部アンデス山脈の東斜面にあるメンドーサ州は南米のカリホルニアといわれ、ブドウの栽培とブドウ酒の名産地である。南部リオ・ネグロ地方はリンゴとナシの栽培に適し、年々良質な物が増産されつつある。國の南端は交通の便が悪いのと寒いのとで未開發の地であるが、コモドロ、リバデビアは石油産業の中心であり、リオトルビオは石炭が産出される。その他、大規模な牧羊が行われている。

海岸線が長く、漁業の資源は、実に驚くべき豊富さで、その将来性は底知れないものがある。殊に大牧畜國であるアルゼンチンは、肉が豊富なため、魚肉に手を伸ばそうとしなかったが、追々需要は漸増しつつあるので遂次盛んになる事が予想され有望視されている。目下、日本の二つの漁業会社の進出によって、五、六隻のトロール船が盛んに活躍し好評を博している。

政体Ⅱ立憲共和政体

宗教Ⅱカトリック

國語Ⅱスペイン語

通貨Ⅱペソ（一ドル約八三ペソ）

日本国土の八倍もある広大なアルゼンチン國に住民は僅か二千万人に過ぎない。人的資源と経済力の不足とで、豊富な天然資源は今なお未開發のまま放任されている部分が多い。好適な気候は精神の緊張を和らげ、天恵豊かな環境は至極ノんびリした亜國民を作り上げたのである。明日主義とでもいうか、今日なさねばならぬ事でも明日に廻せばよいといった風で進んでいるのだから生活苦の深刻さなど知らないのである。せまい島國に息詰まるほど人間が多く、働けどなお暮らし足らざる日本と比較すれば実に雲泥の差である。亜國は豊富な天然資源を有しながら、勞資の不足のため、あたかも宝の持ち腐れの状態にある。亜國のより向上發展のためには先づ人力と金と技術が必要である。有無相通するの理で、日本の進歩した科学工業力と、有り余る人力とを進出せしめ得る可能性は多分にあり、そして亜國の産業文化に寄与貢獻すべきである。

われわれ日本人に対して、亜國の官民は個人的には幸い非常に好意的で、且つ又われわれの勤勉さをも充分認めている。過去においては、近親の呼寄せ以外には入国許可を与えなかったのであるが、一九五七年に集団的計画移住者四百家族の枠を認めたことは好意の現われであり、見方によっては試金石ともいうべきであろう。良好な実績を挙げ得たならば更に枠の拡大をも約束されているのである。現在、アルゼンチンに在住する日本人の数は約一万五千人である。その大多数が資本らしい資本を持って入国したのではないが、いずれも各々そのところを得て生活の基礎を築き上げている。この事実からしても、優れた健康と働く意志さえあれば、生活難は絶対に無いと断言出来る。また努力と手腕によっては予想以上に延び得る可能性や機会は充分にある事を特に付け加えて置きたい。

(筆者 片山良平 アルゼンチン拓殖協同組合長 日本海外協会連合会アルゼンチン支部長)

アルゼンチンの人のこと

アルゼンチンを除いた中南米諸国の人々は、アルゼンチンの人のことをあまりよくいわないようである。とっつきが悪い、生意気だ、ごうまんだ、中南米の他の国のことを馬鹿にしている等々、アルゼンチン人に対する風当りは仲々きびしい。実際私もこの国に来る迄にそういう批評をたびたび耳にしていた。

しかし着任以来一カ年、この国のいろんな階層の人々に接してみると、どうもこの世評はそう当たっていないような気がする。

もともと一國の国民性を簡単に定義づけてしまうことは危険なことだが、たしかにアルゼンチン人はスペイン人や他の中南米の人々に比べると、とっつきはよくないようだ。

スペイン人によくあるように、そしてラテン・アメリカ人の特性のように日本でも思われている例の「一度会ったら百年の知己のように」振舞うというようなことは、この国の人々にはあまり得意でないらしい。汽車の中でも直ぐに話かけてきて、三十分もすればその人の生涯から家庭の模様までもすっかり判るというようなことは、中南米の他の国に比べるとずっと少ないように思われる。

しかし、それは決してこの国の人々がごうまんであるとか、生意気であるとかいうことでは

なくて、よい意味での個人主義が他の中南米諸国におけるよりも発達していて、自分の自由を守るとともに他人の自由をも尊重する結果ではないだろうか。そういう意味で、アルゼンチン人は他の中南米の人より西歐的であり、より都会人であるということが出来るのではなからうか。

アルゼンチン人は決して生意気な国民ではない。都会的といっても決していわゆる都会人のように厭に取りすました国民ではない。小さな例だが、私はここに一年間住み、通りがかりの人にたびたび道をきいたが、一度だって不親切な人に会ったことがない。又この国の人々ほど人種や階層によって人を区別しない国民も中南米に珍らしいのではないかと思う。

それにしても中南米におけるアルゼンチン人に対する悪評が多いのは、どうもこうした性格的なことよりも、アルゼンチンに対する若干のねたみが原因しているのかもしれない。

中南米全体の小麦の生産量の約五分の四を占め、北米、カナダに次いで世界第三の小麦輸出国である他に、とうもろこし、亜麻仁の生産で断然他国を引き離している。農業資源に恵まれた国、人口の二倍以上の牛、羊を有する世界一、二の牧畜国、というのみならず、工業水準もブラジルと並んで中南米の最高を占め、しかもその首都ブエノス・アイレスは中南米第一の大都会であるというこのアルゼンチンに、若干のねたみを他国の人々が感ずるのも止むを得ないかも知れない。

ともあれ、この国に在住する約一万五千の邦人は誰に気がねもせず、日本人であることを誇りにして、何を生産しても十分な市場に恵まれた國で、日々その發展をつづけているが、アルゼンチン人の悪口をいつているのをまだきいたことがない。

(筆者 林屋榮吉 在アルゼンチン大使館書記官)

ミシオーネス州の概要

ミシオーネス州が邦人發展の楽天地として、大きくクロイズ・アップされ、ガルアペー植民地の購入によって、八十家族の入植がいよいよ実現する事になり、その先發隊として既に二十數家族を迎える事になったことは誠に御同慶のいたりである。

ミシオーネス州こそは、開拓者の血の滲む努力と創意によって、豊富な資源を開発して、今日の成果を挙げたところであるという事が出来るであらう。

では、このミシオーネス州とはどんなところであるか、われわれの希望の地としてどれだけ条件を備えているか、私は亜国政府發表の統計や、数少ない専門家の記述を基準として、出来るだけ正確に、ありの儘の姿を概略的に描き出して見たいと思う。

幸いにこれから入植せられる方々に何等かの参考になれば望外の喜びである。

恵まれた自然的条件

ミシオーネス州は、アルゼンチンの最東北端に位置する。ブラジル及びパラグアイと国境を接し、アルト・パラナ河とウルグアイ河に囲まれた面積二万九千八百平方キロの亜熱帯地である。

南緯二六度から二八度にまたがり、降雨量年千四百から千八百ミリ、赤色の肥沃土に包まれ

したたるがごとき緑の森に蔽われた丘陵地帯をなしている。州の北端にあるイグアス大瀑布は景勝の地として国立公園に指定され、世界的にも有名な大瀑布として、皆さんも既に御聞き及びのことと思う。

州の首府たるポサダス市が海拔六〇米の高さにあり、そこから州全体が中央を縦走するミシオーネス山脈に向かって小高いうねり状をなして盛り上っていると形容したらよいであろう。従って州内割るところ景勝の地に富み、雄大な自然と風光の明媚には、この地を訪ねた人々は唯絶讃の言葉を惜しまないのである。

このように州全体が海拔百米から四百米の高さにあるために、亜熱帯地であるにもかかわらず、非常な健康地であり、清浄な地下水は到るところに得られるから、悪質の風土病などというものは今日まで発生した事が無いことを特に強調してよいと思う。

年平均温度は大体摂氏二二度、最高四十度、最低零度であり、決して暑過ぎるということはない。むしろ好適の気温ではなからうか。且つ降雨量が多いために樹木の成長は早く、州全体が豊富な木材資源にめぐまれ、今後とも製紙用又は家具、建築その他に使用する優良材の植林地として、その将来を嚆目されていることは、誠に当然の理由があるのである。

こうした天恵の氣候、風土にめぐまれた地帯であるばかりでなく、亜國民の日常愛用するマテ茶の特産地であるために、その将来性は衆人の注目するところとなつて、一九一八年に僅か

五万九千人の人口が、四十年後の今日、三十七万七千人という五倍を超過して、その人口密度は一キロ平方に十二人というアルゼンチンにおける第五位の州にまで発展した。

こうした非常な発展をもたらした事実が、以上示したごとく自然的条件に大きくめぐまれていたことを如実に証明していると思うのである。いわゆる「緑の地獄」等とは余程縁の遠いところであり、また日本人植民地の選定に際して、第一の候補地に挙げられたのも誠に正鵠を得た処置であつたと考えられるのである。

開拓と発展の歴史

ミシオーネス州の開拓が軌道に乗つたといおうか、今日見るが如き発展をきたした本格的な、また継続的な入植運動は一九二〇年前後、即ち第一次欧州大戦直後と見るのが至当であらう。

アルト・パラナ河に沿って、エル・ドラード、モンテカルロ、サン・アルベルト、プエルト・リーコ、サント・ビポー等の植民地が、ポーランド、ロシア、フィンランド、スエーデン、スイスその他北欧諸国より渡来した開拓者によって建設されたのを始め、その後オベラ、レアシンドロ・アーレム等奥地に向かつて新たな植民地が統々と建設されて行つた。日本人も一九二五、六年以後、開拓者としての榮譽の一端をになうことになつた訳である。

これは殆んどマテ茶栽培の有望性と天与の自然にひかれて、文明開化の斧が、その当時まで長らく放置されていたミシオーネスの山野を伐り開くことになったわけであるが、ここに特にわれわれが注意すべき点は、これら入植者の殆んどすべてが自作農であったこと、平和な新天地を求めて欧州の戦禍から逃れて渡航した健全な開拓者であったことである。

従つてそこには労働搾取とか、人種的偏見、又は現住者との軋轢といったような社会問題は全然存在せず、その歴史は未来の希望に輝いた開拓者が、ミシオーネスの山野にいとむ苦闘であつたといつたらよいであろう。その人口構成を見ても、八一・四%が農業者であることは如実にその間の事情を物語っていると思う。

一九五七年度の人口調査の結果は、一九三八年のそれに較べて殆んど二倍に増加して、次の通りの数字を示した。

亜國人	二八五、九六九人
外國人	七三、三〇四人
總人口	三五九、二七三人

この中、亜國人といつても大部分は外國人の子弟と見るべきで、總人口の七割までが欧州系統の血をうけた白人種である。

こうした人口の増加と資源の開発に伴つて都市も發展を遂げ、州の首府たるポサードス市は

近代都市としてのあらゆる機関を備えるにいたった。最近の調査による主だった都市の人口は左の通りである。

ポサーダス市 五二、六〇〇人 オペラ 六、八〇〇人

アポストレス 四、七〇〇人 カンデラリヤ 二、七〇〇人

エル・ドラード 二、六〇〇人 プェルト・リーコ 二、三〇〇人

このように過去四十年間に驚異的な発展を遂げて、今日幾多の大成功者を出したミシオーネス州は、その以前はどういうところであったか、少しその歴史をのぞいて見よう。

アメリカ大陸発見以後、スペインの南米大陸の征服と植民時代を通じて、この地帯はポルトガル領との境界線に接し、長い間紛争が絶えなかった。

一六一〇年にいたり、ヘスイット会の神父達は、この係争地帯の土人の教化をスペイン王の名において委任を受け、大いに布教に務めた。山野に起居する土人を集めて耕作法を教え、規律ある労働と生産物の貯蔵、分配等文明人の生活方式に土人を指導して、マテ茶、棉花、蜜柑等の生産は、神父達によって広く紹介され、また栽培されたのであった。このレダクシオンに集まった土人の数は二五万人といわれ、幾多の村を建設して一王國の觀を呈した。神父達は土人に深く尊敬され、土人はその指導に従順であった。

このヘスイット会神父の土人教化は一七六八年まで、殆んど百五十年継続したのであるが、

一七五〇年にポルトガルとの紛争事件解決の条件として、その教化区域の一部を、スペイン政府がポルトガルに譲渡したことによって土人の反感を買い、その協定の実行を阻止せんとしてグワラニー戦争となり、遂に一七六七年には神父の追放処分となって、その地帯はリオ・デ・ラプラタ総督直轄の地となった。

この神父達の追放によって、土人は再び部落を捨てて山野に戻り、教化事業はここに全く崩壊した結果となったけれども、今日なお当時をしのぶよすがとして、ミシオーネス州には、サン・イグナシオ、アポストレス、サンタアーナ、カンデラリア等の町の名がそのまま残っている。この中でもサン・イグナシオの遺跡は最も有名であり、歴史的記念物として保存されている。

その後、アルゼンチン及びブラジルの独立となって以後も、国境の紛争はその儘持ち越されることになって、遂に一八九〇年、時の北米大統領クリブランドの仲裁によって、今日の国境線が最終的に決定されることになったわけである。

ミシオーネス、それは布教という意味であるが、昔グワイラーといわれたこの地方が、ミシオーネスと呼ばれるようになったのは、こうした史実に起源を発していることを知って置く必要があると思う。

一八八一年には亜国中央政府直轄県としての法令が布かれ、一九〇八年に初めてポサーダス

市まで鉄道が開通した。従来のパラナ河による河船の運行に加えて、一段とこの方面の開発の気運を醸成したといつてよいであらう。

その後の発展の模様については既に記述した通りであるが、一九五三年にいたっては自治州となり、干渉使の派遣となつていたが、今年即ち一九六〇年の三月に漸やく州知事、州議員その他市長、市会議員の選挙が行われることになつてゐるから、これで初めてミシオーネス州が、アルゼンチンの他の諸州と並んで政治的にも大きな役割を果すことになつたわけである。

産業の驚異的發展

以上簡単ながら、そのめぐまれた地勢とあらましの歴史を記述したことによつて、ミシオーネス州が大体どういふところであるか、入植地として果して適合しているかどうか、大体の概念が得られたことと思ふ。

では次に産業上の発展について述べるならば、二十世期の初期、即ち今から六十年以前、この地方はマテ茶の栽培と、優良な木材（セドロ、ラバチヨ等）の伐採や煙草栽培を主たる目的として、ポサídas市から水利の便を得たアルト・パラナ河に沿つて、徐々に開発の斧が向けられ、それにつれて、それらのものを買取り、ブエノス・アイレス市に輸送すると共に、同市から食料品その他必需品を売込む、いわゆる「ラーモス・ヘネラーレス」を業とする商人も定着

するようになり、徐々に發展の過程を辿って行った。

しかし、何といつてもミシオーネス州發展の動機となり、多数の入植者を迎えた所以のものは、この地方の特産物であるマテ茶栽培の有望性であったことを挙げねばならないであろう。

ミシオーネスといえはマテ茶を思わせる程、それは有名且つ大きな財源となった。

このようにマテ茶に始まったミシオーネス州の開発は、その後欧州諸國の入植者の努力と苦闘の結晶によって、偉大な發展を遂げ、今日は桐油、紅茶、木材、製紙、マンシヨカ、煙草、密柑、その他各種の生産にまで拡大して、その将来に大きな期待が懸けられている。

では次にミシオーネス州現在の主要生産物について一覽を与えて見よう。

一、マテ茶

植付面積五万六千七百町歩、樹木数五千八百万本、その收穫高は十万二千五百トンに達し、全国の九九%を占めた。その仕向先は殆んど国内消費である。

マテ茶の植付けについては、二十数年前、市価の暴落にかんがみ、統制委員会が結成され、新規植付けを抑制したために、一九三八年以後植付面積は殆んど現状維持であったが、過ぐる二年だけ植付けを許したので幾分の活況を呈した。

従つて、既に植付けを完了した既入植者にとっては、確かに安定した産業ではあるが、これから入植する人達には大きな制限がつけられている。

しかし、このように植付制限を行なっている一面に、一九五八年には、ブラジル、パラグアイ両国から四万三千トン、金額にして一千五十万ドルの輸入を見ている事実からして、この植付制限には大きな矛盾があり、今後ある程度の緩和を見るのが当然であろう。

二、桐油

一九二八年に試植された桐油の樹は、第二次欧州大戦の勃発以後、支那市場からの供給が杜絶したために、ミシオーネス産の桐油は急激に発展して、一九五七年には

植付面積

四八、四四〇町歩

収穫高

一一四、五六〇トン

に達し、マテ茶を凌ぐ主要産物にまで延び上って、搾油工場の建設と相俟って、エル・ドラード、オペラ及びサント・ピポー等の諸都市に大きな発展をもたらした。

三、紅茶

一九二四年以来、在ロレットの農事試験所で幾多の試験の結果、ミシオーネスの気候は丁度亜熱帯アッサム種の栽培に適することが立証され、一九四八年にいたって五千キロの種子をミシオーネス及びコリエンテス州の三千人の農家に分譲したのが、今日の隆盛の始まりといわれている。

当初は印度セイロン茶の名声におされて、ミシオーネス産の紅茶など殆んど相手にされな

ったが、一九五二年以後匪國政府の爲替管理に引続いて輸入禁止ということになって、ここに初めて脚光を浴びて登場することになったわけである。その生産量は一九五八年に四万六千トンに達し、既に国内消費を満たして、二万トン以上の輸出余力を持つにいたったが、この中ミシオーネス州は全国の九八%を占めている。

今後残された問題は、品質の改善と統一によって、国際市場で信用を確立することであり、このために今度新らしく「紅茶研究委員会」が結成された。

四、木材資源

亜熱帯地特有の気候と、年間千五百ミリに達する多量の降雨によって樹木の成長は早く、州全体の八四%、即ち二百五十万町歩が森林地帯をなして、豊富な木材資源を有している。

その主だった種類は、セドロ、ラパッチョ、グッタンプー、インシエンソなど、家具、建築、合板、杭木用その他の優良材を初めとして、ミシオーネス松（アラウカリア・アングステイフオリア）その他薪炭用の雑木であるが、第二次欧州大戦勃発後、外国からの供給が杜絶したことによって、俄然活況を呈し、その後も引続きアルゼンチン国内の木材供給地として、殆んど四割以上を占め、製材所二百五十、合板製造工場十二という盛況を示している。

従って、今日までアルト・パラナ河及びウルグアイ河一帯にわたって伐採が行われ、それは殆んど濫伐に近いものであったが、それでも現存する木材資源は、優良材と松だけでも八百三

十五万立方米と計算され、薪炭用の雑木にいたっては二千万乃至三千万トンと計算しても大きな間違いはないであろう。

これ等木材生産量は一九五四年度に次の如き数字に達したことが発表されている。

丸太材	二十二万トン
合板	一万五千立方米
薪材	三十二万トン
杭木	一千三百トン
木炭用材	一万五千トン

その後の数字は不明であるが、大体毎年同量の伐採が行われたとしても、それは国内の需要を満たし得ず、これ等ミシオーネス産と同種類に属するセドロ、ノガル、カオバ等の優良材の丸太を、主としてブラジル、パラグアイ西国から、一九五八年度に約三十万トン、金額にして一千二百万ドルに達する輸入を見たことになっている。

この外に製紙用パルプも国内需要の大部分を輸入に依存している現状で、一九五八年度の統計ではその数量約十三万五千トン、金額は二千万ドルを超過した。こうした現状にかんがみ、植林事業の有望性が注目されていることは当然であって、既に亜国最大の製紙会社セルローサ社が五千町歩の松樹の植林を行なったのを初め、各方面に具体的な計画が進められている。

唯、問題は品種の選択と運搬費とされているが、いずれにしても、木材供給地としてのミシオ
ーネス州の将来に対する期待は大きい。

五、柑橘類その他

密柑、ポメロ、レモン等柑橘類の生産も相当の実績を示し、国内消費の外に輸出を目標と
して、近年特にその栽培面積を拡大している。

州の特産品たる「マンシヨカ」は馬鈴薯に代る常食用として、また澱粉原料としても有名で
あり、煙草は既に古い歴史を持って、どの農家でも栽培している。

その他、甘蔗、豆類、カボチャ、トモロコシ等短期作物も栽培され、入植者の家庭経済を
うるおしている。また、大豆の将来にも大きな期待が懸けられている。

現在の生産状態は大体以上の通りであるが、この販売加工には、個人企業の外に五十に達す
る生産者組合があり、組合員数二万九千人、その取扱高は一九五七年には三億六千万ペソに達
した。

以上の生産状況の主だった数字を一括して示すと左の通りである(一九五七年)。

	耕作面積(町歩)	収穫高(トン)	全国比
マテ	五六・七〇〇	一〇二・五〇〇	九九%
茶	四八・四四〇	一一四・五六〇	九七%

紅茶	二九・五〇〇	四二・九五〇	九八%
マンジョカ	一五・六〇〇	二一・一〇〇	九〇%
煙草	五・八〇〇	五・一〇〇	二〇%
密柑	—	五五・九〇〇	十二%
レモン	—	四・三〇〇	五%
ポメロー	—	五四〇	二・七%
甘蔗	一・二〇〇	九・六〇〇	三%
カボチャ	二・一五〇	一〇・二〇〇	四%
豆類	一・二〇〇	一・一〇〇	—
大豆	九五七	五〇三	九九%
トモロコシ	三二・五〇〇	二九・〇〇〇	—
米作	二・九〇〇	六・七〇〇	—

今後に残された問題

以上の通りミシオーネス州が今日まで発展して来た過程について、その概略を記述して見たのであるが、今後に残された問題、特にその発展の支障となっているもの、また、飛躍的な発

展を策するための具体案等について、専門家の意見を総合すれば、大体次の通りに要約出来る
と思う。

一、運輸・交通の問題

州内の運輸・交通は鉄道が未発達なので、アルト・パラナ河の水運を除いては、すべてを道路に依存し、国道第十二及び十四号の二大幹線は最重要交通路をなしている。しかし未だ舗装されていないので、降雨の時は一切の交通が停止するのが現状である。

州内の道路全長二千キロとなっているが、その修理と改善が強く要望されている。それと同時に、ポサーダス市から亜国の首府をつなぐ河船と鉄道の改善も生産者全体の重大関心事である。生産物はいずれにしても一応はフェノス・アイレスまで出さねばならないのであるが、その輸送費の高価なために、大きな不利を来していることを指摘せねばならない。また貨物自動車
の便もあるが、舗装されていない上に修理が行届かないため大きな支障となっている。

運輸・交通問題の改善こそ第一に採り上げられるべき問題であって、今後の発展もこれに依存しているといえるであろう。

二、木材資源の保護と植林

豊富な木材資源も今日までは伐採するだけで新たな植林が行われていないので、毎年減少しているのが現状である。このためにはせひとも確固たる植林政策を樹立して、新たに植林する

樹木の品種の選定、その苗木を広く農家に分譲すること且つそれに必要な資金の融資が急務として指摘されている。

三、官有地の分譲

州政府の所有に属する土地が、州面積の二割九分即ち八十四万七千町歩あり、この中既に測量され、区割されたものは四十一万町歩、残り四十五万町歩は測量もされずに放置されているのが現状である。

この測量済みの州有地の中で四六%は適格入植者に地券を交附されたが、残り五四%は未だ地券が渡されていないのである。

従って、この州有地の開発と、適格入植者に分譲あるいは地券を交附することが、州政府に課せられた任務であり、一般の要望でもある。

四、新分野の開拓

ミシオーネス州が今日大きな発展を遂げた所以のものは、そのめぐまれた自然的条件と開拓者の努力によることは勿論であるが、その原動力となったものには、長年の科学的研究と試験の結果に負うところ非常に大きかったことを見逃してはならないのである。桐油、紅茶にしても、それは農事試験所の苦心と努力の結果であったことを思えば、今後とも試験所の充実と、科学者の研究に期待するところは最も大事なものがあると思われる。

距離的な不利を克服して、この州の特産となる一年作のもの、又は永年作のものでも、新たな産業が興れば入植者の経済をうるおすことは如何に大きいか、想像にあまりあるものがあると思われるのである。

五、牧畜、鉱物資源その他

今日まで州の産業は農業と林業、及びその加工業に主力が注がれ、牧畜は殆んど自家用として飼育された程度であるが、それでも現在は、牛十七万頭、豚七万五千頭、羊一万三千頭、馬四万頭という数字に達している。将来、輸送の改善と、亜熱帯地向きの新品種を移入することによって、この牧畜業も決して見逃してはならない新産業と思われる。

鉱物資源も今日まで殆んど未開發であったが、ミシオーネス山脈には相当の鉱物資源が埋蔵されているといわれ、石油も発見されたかにいわれているから、今後の調査と研究によって、大きな発見がもたらされないとはいえないと誰も予言は出来ないであらう。

附記 本文を草するにあつて、パストレー教授の「亜国経済地理」、レヴェンネ教授の「亜国歴史」ガラシーノ氏著「ミシオーネス」及びフレアサ氏の「ミシオーネスの問題」を特に参考資料とした事を附記する。

(筆者 服部豊三郎 在亜三十二年、亜拓理事、森田鉄工所経営)

ミシオーネス州に於ける邦人発展の模様

ミシオーネスにおけるヨーロッパ移民発展のあとをさぐって見ると、一八九七年八月二七日、ポーランド人がボサーダスの南方アポストレに入植したのが初めである。時のミシオーネス州知事は移民審議会を開いて、これ等の移民の能力に応じて、二五町歩乃至百町歩の原始林を無償で彼等に与えた。

ポーランド人に続いて、ドイツ人、スイス人、オーストリア人、オランダ人、白系ロシア人などの北欧系の移住者が、続々と入植して来たのであった。ドイツ人植民地として有名なエルドロード植民地も、アドルフオ・シュウレム氏がアルト・パラナ沿岸のこの地に入植したのが一九一九年九月二九日で満四十年を経過した。この日を期して創設四十年記念の式典が行われたし、ガルアペー移住地とは最も関係の深いプエルト・リーコもエンリケ・グンテル氏が入植してから満四十年を迎えたので、十二月二七日、創設四十年記念式典が催された。在亜日本人も、おくればせながら、小數ではあったが、これに続いて入植しはじめたのである。次に邦人発展のあとをさぐって見ることにする。

ミシオーネスにおける邦人入植者の先駆者は帰山徳治氏である。氏は北海道の人、海外発展

社長田中誠之助氏の主唱した新日本建設の意志を継承して、家族同伴来亜したのは一九二〇年六月である。そして渡亜の第一志望であったミシオーネス入植を計画し、ポサーダス市より五キロ離れたサンタ・アナに二十五町歩の原始林を購入して入植したのは一九二一年十月。今から三九年前のことで、在亜邦人ミシオーネス入植の草分である。当時はミシオーネス県（テリトリオ）の人口わづかに六万三千人にすぎず、ポサーダス市も一万足らずの田舎町であったのであるから、サンタ・アナは人跡未踏の山間へき地であったといえる。帰山氏は入植すると同時にうっ蒼と繁る原始林を伐採し山焼し開墾して堀立小屋を建て、井戸を掘り、ゼルバ・マテ樹の苗を購入して定植した。間作として煙草、マンジョカ、玉蜀黍、豆類、アルファルファなどを植え、豆と玉蜀黍、マンジョカを主食とし、粗食に耐え、言語に絶する茨の道をたどり、十六年目にしてやっと苦難の時代を突破し得たという。彼の先べんが動機となって引きつづき一九二三年には柏木善吉氏がロレートの官有地に入植した。次いで鴨原浪五郎氏、佐藤大美氏が入植したのである。

▽サン・イグナシオはサンタ・アナより十五キロ離れ、国道十二番線に沿った歴史上有名なヘスイータ教徒の伝道の旧跡「ルイナ」のあるところである。ルイナとはサン・イグナシオの魔窟のことである。ここにはじめて入植したのは在亜邦人としても大先輩の山口喜代志氏である。翌二六年に土居栢縁氏がヘネラル・ロカに入植し、長井富士夫氏、石幡任氏、岸野高之助氏な

どがサン・イグナシオに入植したのだった。二七年には東郷二夫氏、中林久太郎氏、木村末吉氏などの入植を見て、いよいよミシオーネス発展の基礎をかためたのである。

▽オベラ 一九二八年には帰山徳治氏はサンタ・アナよりオベラに発展した。ついで帰山勇松氏、大高嘉太郎氏、西村栄次郎氏、蒲田確藏氏などが入植した。二九年には蒲田國五郎氏、首藤太平氏、三〇年には箕浦次郎氏、渡辺雄二氏、三一年には須山銀藏氏、三二年には小松藤けさ氏、中塚等司氏、三三年には宮内寿氏などが続々と入植した。オベラはポサーダス市から百キロ離れた国道十四番線にあり、日本人が入植した当時は、ただ、二、三軒の小屋がけの家があった小さい寒村であったという。

▽カンポ・グランデ オベラより更に四十五キロはいった奥地である。この地に最初入植したのは後藤良吉氏、佐藤吉郎氏、菅野春吉氏、菅野福松氏、福田準氏、野首愛之助氏などで一九三二年のことである。翌三三年には陸地勘助氏、三四年には桑原里見氏が入植した。

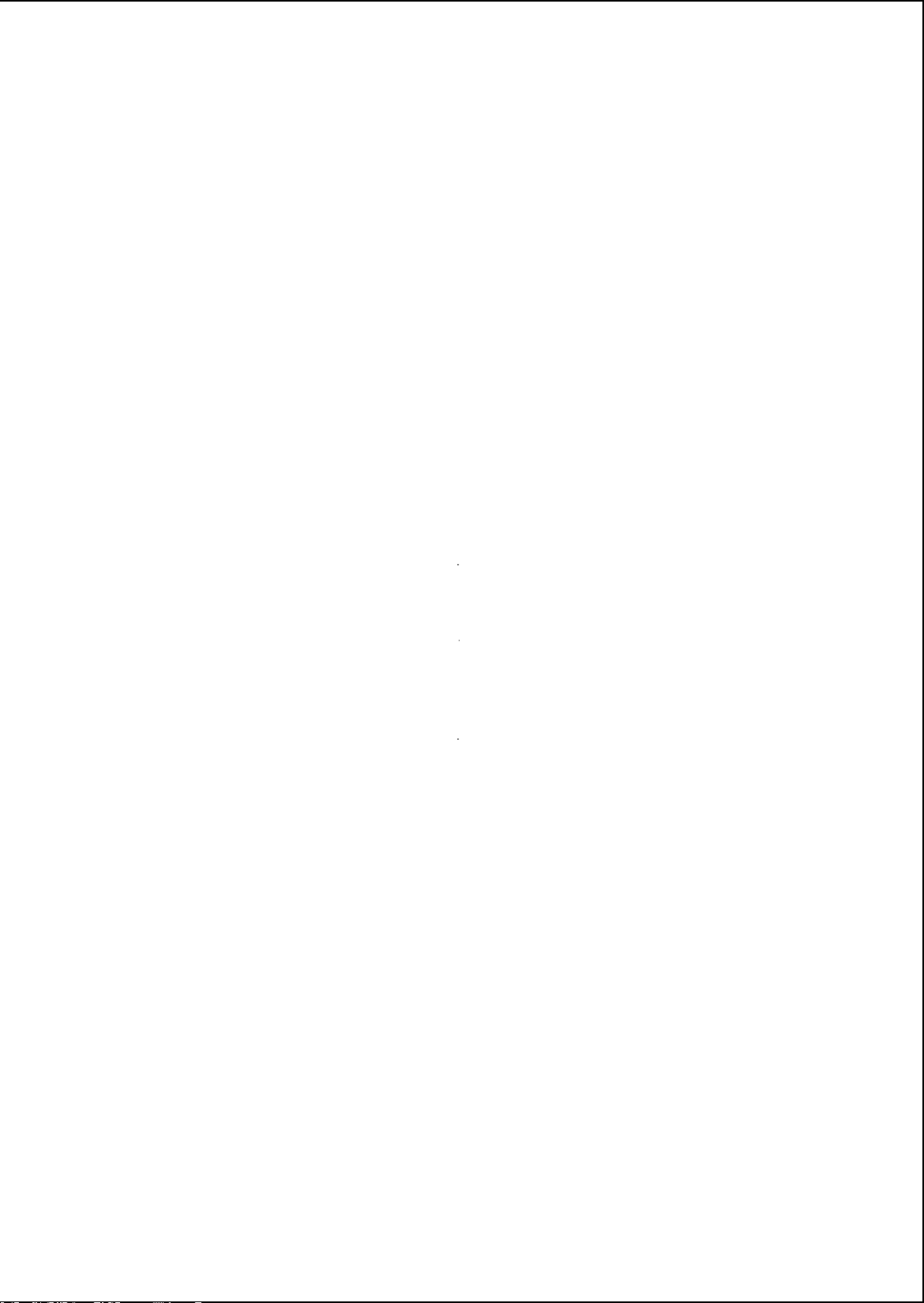
▽ハルディン・アメリカ 現在、ミシオーネス邦人発展の中心となっているハルディン・アメリカは、国道十二番線に沿った比較的新しい植民地で、ポサーダス市より約百キロある。高島五作氏、安保秀雄氏、長谷才助氏などの入植にはじまり、蒲田宝氏、加藤木盛太郎氏、中林重一氏、その他、戦後重拓の呼寄で来亜した移住者の独立経営も増え、四十組近い邦人が発展してゐる。

.....

チン東北部アルト・パラナ河に沿い、州の首都ボサードス市から百七十五軒のところであり、州の中央部に当り、国道十二番線に接している。地味は赤土で極めて肥沃、適作物は永年作物として、紅茶、柑橘、パラナ松、ユーカリ樹、油桐、ブドウなどで、間作物としては煙草、マンジョカ芋、玉蜀黍、大豆、豆類などである。

一九五九年四月十八日第一回の入植者四家族が来歴し、すでに年末までに二十六家族入植した。世帯数、家族数を示すと、

月日	世帯数	家族数
四月一八日	四	二一人
五月一六日	一	四人
六月七日	五	二八人
六月一七日	四	二三人
六月二九日	二	一二人
七月六日	二	八人
十月七日	五	二五人
十月三一日	二	一二人
十二月	一	六人



アリストプロ・デ・パーシエ	一〇
ドス・デ・マーシヨ	二〇
ガルアペー	三
ガルアペー移住地	三一
計	一七一

以上のとおり、在連日本人がミシオネス州に入植し始めてから滿四十年になる。独立経営者数百七十家族を超え、所有面積一万三千町歩余、耕作面積四千町歩に達する盛況を呈しているのである。

ミシオネスの先輩が、今日の如き偉大なる発展をもたらした第一の素因は、氣候、風土など好条件であつたというほかに、初期に入植した先輩諸氏が、いかなる困苦にもよくたたかひ、これをよく克服した忍耐力と、自給自足の体制をととのえ、時代に即応した経営により、永年作物の栽培に集中し、懸命の努力をおしまなかつたからにはかならない。

これから入植される人々も、各自の天分に応じ、先輩諸氏の知識を活用し、相協力して、時代に即した、新しい産業面の開拓と、経営面の合理化を計り、百年の計を立てて植民者としての本分を完了するよう希望するものである。

(筆者 賀集九平、在連四十一年、重拓理事、花卉・果樹園経営)

ミシオーネス州の産業の大要

ミシオーネス州は、ブラジルとパラグアイとの間にはさまれ、パラナ河とウルグアイ河に包囲された小さい州で、自然の状態は、アルゼンチンというよりブラジルによく似ており、ブラジルの奥地からつついている波状高原の延長地帯で起伏が多い。亜熱帯に属し、気温もかなり高い。土質はアルゼンチンとしては珍らしい肥沃な赤土である上に、雨もブエノスの二倍程度降るので、植物の成長は極めて旺盛である。

植物の分布状態から見ると、ミシオーネス州は不思議な土地で、特産といわれているゼルバ・マテ樹は勿論のこと、バナナ、パインアップル、マンゴーなど台湾やハワイでよく見られる亜熱帯の果樹がよく出来るかと思うと、北海道や満州での特産物の大豆や小豆がよく栽培されている。また、亜熱帯ではよく開花しないといわれている日本の桜も、この地ではよく生育もし開花もするというわけで、亜熱帯、温帯、亜寒帯の植物がミシオーネス州では仲よく混生しているというのが実状である。

州の八〇%はうっ蒼たる原始林でおおわれていて、耕作面積は二十二万町歩に達する。

次に主なる農産物の栽培面積を示すと

ゼルバ・マテ	五七、〇〇〇ヘクタール
桐油(ツング)	四七、〇〇〇
紅茶	三〇、〇〇〇
玉蜀黍	三〇、〇〇〇
マンジョカ	一六、〇〇〇
柑橘類	一〇、〇〇〇
タバコ	五、〇〇〇
米	二、五〇〇
大豆	一、二〇〇
甘藷	一、〇〇〇
馬鈴薯	一、〇〇〇
豆類	一、〇〇〇
綿	九〇〇
パイナップル	六〇〇
落花生	四〇〇
ブドウ	四〇〇

長い間、統制下にあったマテ茶は、老衰と霜害による枯死で生産の不足を告げてきたため一九五八、五九年の二カ年にわたって、一戸分として十五町歩の新植を許可したので、この二カ年間に新植された面積はかなり広いと見てよい。それで今のところ今後の入植者は次の機会を待つ外はない。

マテ茶の生産統計を示すと

年 代	ミシオーネス	コリエンテス	総 計
一九四〇年	六五、〇〇〇、〇〇〇キロ	三、七〇〇、〇〇〇キロ	六八、七〇〇、〇〇〇キロ
一九四五年	七九、五〇〇、〇〇〇	四、四〇〇、〇〇〇	八四、〇〇〇、〇〇〇
一九五〇年	九七、一三二、〇〇〇	六、一四〇、〇〇〇	一〇三、二七六、〇〇〇
一九五二年	一二九、九二七、〇〇〇	七、一〇五、〇〇〇	一三七、〇三二、〇〇〇
一九五五年	一〇八、一〇〇、〇〇〇	七、二〇〇、〇〇〇	一一五、三〇〇、〇〇〇
一九五七年	一〇二、五〇〇、〇〇〇	七、三〇〇、〇〇〇	一〇九、八〇〇、〇〇〇
一九五八年			一一二、〇〇〇、〇〇〇
一九五九年			一〇六、〇〇〇、〇〇〇

現在、一カ年のマテ茶の生産高は一億キロ余と見ればよい。なお、栽培の要点を示すと

播種期 四月～五月 仮植期 半陰高床 十月～十一月

定植期 五月と七月 株間 三米と三米半（一〇〇〇本）

収穫始め 定植後三年目より収穫採葉し始める

一町歩からの収量（製茶量）を示すと

年代	採葉量	製茶量
三年	三、〇〇〇キロ	一、二〇〇キロ
四年	四、〇〇〇〃	一、六〇〇〃
五年	五、〇〇〇〃	二、〇〇〇〃
六年	六、五〇〇〃	二、六〇〇〃
七年	八、〇〇〇〃	三、二〇〇〃
八年	一〇、〇〇〇〃	四、〇〇〇〃

八年後は最葉期にはいり、一町歩より青葉一万乃至一万二千キロを生産し、四千キロ内外のマテ茶が製せられる。

油桐の栽培

支那の原産樹木で、この種子より搾った油を桐油（とうゆ）という。乾性油でペンキ、ニスなどに混用する他、印刷にももちいられ、特に飛行機油として賞用される。

第二次世界大戦前に、支那桐油の輸入困難を見こして、北米がこの栽培を奨励したもので、マテ茶が統制作物となり、新植が禁止されてから、油桐が永年作物として非常に多く栽培されたので、現在でも、マテ茶に次いで栽培面積四万七千町歩に達する。生産統計を示すと

年代	ミシオーネス		コリエンテス		総計
	キロ	キロ	キロ	キロ	
一九四〇年	四、八〇〇、〇〇〇	二、四〇〇、〇〇〇	七、二〇〇、〇〇〇		
一九四五	一一、九〇〇、〇〇〇	二〇〇、〇〇〇	一二、一〇〇、〇〇〇		
一九五〇	八二、〇〇〇、〇〇〇	三、七〇〇、〇〇〇	八五、八〇〇、〇〇〇		
一九五五	一一三、〇〇〇、〇〇〇	一、三〇〇、〇〇〇	一二四、三〇〇、〇〇〇		
一九五八	一一四、六〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一一五、六〇〇、〇〇〇		

で、最近の一カ年の生産高は一億二千万キロ内外となる。

播種期 八月～九月

定植期 八月下旬

栽培距離 八米×八米

収穫始め 定植後三、四年

盛果期 九～十年目から

盛果期に入ると八千キロ～一万キロの実がとれ、千五百キロ内外の桐油が精製される。

管理作業は極めて容易で、成圃になると除草は一、二回で済むし、収穫にも手間がかからぬので、自家労力のある経営者には好適といえる。

紅茶の栽培

ミシオーネスの紅茶栽培は、最近、新興産業として将来を期待される永年作物の一つである。

アルゼンチンにおける紅茶栽培の歴史は日なお浅く、一九二七年、ミシオーネス、ロレート農事試験場に二年苗の茶樹を百本試験的に栽植したのにはじまり、營業的に栽培しはじめたのは一九四〇年頃からである。四五年には、もう、六万二千キロの紅茶を生産している。生産の過半はミシオーネスで、ミシオーネスに隣接したコリエンテス州の一部でも良質の紅茶が生産される。生産の急激に増加したのは、こわずか三、四年のことで、一九五六年の生産高は八百三十万キロであったのが、翌年の五七年には六倍の四千九百万キロに及んでいる。五八年には四千三百六十万キロ、五九年には四千六百万キロを生産し、その栽培面積は三万町歩に達しているが、その中、日本人の栽培面積は七百町歩にすぎない。

製茶工場の最も大きいのは、ミシオーネスのオペラとカンポ・グランデの間にありハルディン・アメリカにも大きい製茶工場が出来ている。また最近の報道によると、モンテ・カルロにオランダ系の製茶工場が新設中である。これらの製茶工場で生産される紅茶の大部分は輸出向きである。ミシオーネス産の紅茶は他國産のものにくらべて、色が濃く出るのでイギリスはじめ

ヨーロッパ諸国で好評を博している。そこで自然の狀態が紅茶の栽培に適するミシオーネスにおいて、優良なる品種を選び、製茶技術の向上につとめ、良質の紅茶を生産し、その製品をドシドシ海外諸国に輸出し得るようになれば、紅茶栽培の将来も洋々たるものがあるといわねばならない。

いま、アルゼンチンの紅茶の生産統計を示すと

年代	ミシオーネス キロ	コリエンテス キロ	總計 キロ
一九四四～四五	六二、〇〇〇		六二、〇〇〇
一九四七～四八	一九五、〇〇〇		一九五、〇〇〇
一九五一～五二	八一七、〇〇〇	一一〇、〇〇〇	九二七、〇〇〇
一九五四～五五	三、一〇〇、〇〇〇	三〇〇、〇〇〇	三、四〇〇、〇〇〇
一九五五～五六	八、〇〇〇、〇〇〇	三〇〇、〇〇〇	八、三〇〇、〇〇〇
一九五六～五七	四八、五〇〇、〇〇〇	五〇〇、〇〇〇	四九、〇〇〇、〇〇〇
一九五七～五八	四三、〇〇〇、〇〇〇	六〇〇、〇〇〇	四三、六〇〇、〇〇〇
一九五八～五九	四四、七〇〇、〇〇〇	一、四〇〇、〇〇〇	四六、一〇〇、〇〇〇

現在、一カ年の紅茶の生産高は四千六百万キロ内外で、なお、増産見込が非常に多い。栽培

の要点を示すと、

播種期 四月～五月

定植期 五月～七月

株間 二米半×一米(四〇〇〇本)

収穫始め 定植後三年目より収穫採葉し始める。

柑橘の栽培

柑橘の栽培も、ミシオーネスでの重要産業の一つに数えられ、永年作物としてしよく望まれている。

いま、アルゼンチンのオレンジ(ナランハ)の生産高を地方別に示すと(一九五八と五九年度)

州別	生産高
コリエンテス州	一九六、四〇〇、〇〇〇キロ
ブエノス・アイレス州	五七、九〇〇、〇〇〇 "
サルタ州	四六、六四〇、〇〇〇 "
ミシオーネス州	四三、九五〇、〇〇〇 "
ツクマン州	四二、三二〇、〇〇〇 "

この生産統計によっても約四千四百万キロのオレンジがミシオーネス州から生産されること
がわかる。ミシオーネスは柑橘の栽培に適した土地は多いが、中でもパラナ河沿岸のエル・ド
ラード地区、モンテ・カルロ地区に優良な生果が生産される。日本人が入植するガルアペー移
住地も、両地区に隣接したパラナ河に沿った肥沃な土地で、エル・ドラード地区に劣らぬ柑橘
栽培の好適地と見てよい。

気候、土質の関係で、樹の発育が極めて旺盛で、日本やブエノス・アイレス州では想像も及
ばない程の成長を示して、結果数も非常に多い。

柑橘栽培上最も注意すべきは病虫害の防除で、一時は根腐病の被害でかなりの打撃を受けた
時代もあったが、その砧木の試作研究で解決されたので、再び新植するものが増して来た。
これからの栽培者は、いままでのように放任栽培でなく、優良な品種を選択し、肥培管理に努
め、病虫害の防除法を研究し、良質の生果を生産することである。そして海外、ことに北歐諸
国に輸出出来るよう努力せねばならない。

アルゼンチン産のオレンジを海外に輸出するようになったのは、ここ数年のことで、一九五
七年度の輸出高は六百万キロに達する。

いま海外に輸出したオレンジを州別に示すと

州別

輸出高

ミシオーネス州	四、八四四、五四五キロ
エントレ・リオ州	一、一七五、二八九
ブエノス・アイレス州	四七、二五〇
コリエンテス州	四二、九〇〇
サルタ州	五、〇四〇
計	六、一一五、〇二四

この輸出統計によつても、全輸出高の八十%はミシオーネス産であるということが確實であるから、ガルアペー移住地に、果樹栽培に特異性を持つ日本人が入植し、柑橘栽培に努力するならば予期の成果は達せられることと信ずる。

なお、オレンジの他に柑橘類のうち左の種類が栽培されている。ミシオーネスの生産統計を示すと（一九五七〜五八年）

マンダリン（蜜柑類）	七八〇、〇〇〇キロ
レモン	四、三三〇、〇〇〇
グレープ・フルーツ（ボメーロ）	五四〇、〇〇〇

オレンジに次ぎレモンの生産多く、マンダリンとグレープ・フルーツの生産は比較的少ない。

マンジョカの栽培

マンジョカは、面熟帯産の「イモ」の一種で、ブラジルの原産である。ミシオーネスの氣候風土に最も適し、その栽培面積一万六千町歩、生産高二億キロに達する。移住者の食料生産作物として欠くことの出来ない作物といえる。その生産統計を示すと

年代	年	ミシオーネス キロ	他 州 キロ	総計
	一九五四	七〇〇、〇〇〇	六二、六〇〇、〇〇〇	三二〇、〇〇〇、〇〇〇
	一九五五	六〇〇、〇〇〇	五七、二〇〇、〇〇〇	二四七、八〇〇、〇〇〇
	一九五六	五七、〇〇〇、〇〇〇	四七、八〇〇、〇〇〇	二八六、八〇〇、〇〇〇
	一九五七	四七、〇〇〇、〇〇〇	四七、四〇〇、〇〇〇	二五八、五〇〇、〇〇〇
	一九五八	二〇九、五〇〇、〇〇〇	五〇、九〇〇、〇〇〇	二六〇、四〇〇、〇〇〇

全アルゼンチンの生産高の八十％はミシオーネスから生産されるのである。一町歩から約二万五千キロの収量がある。

生産物はそのまま食料にする他、加工して、マンジョカ粉、澱粉、タピオカ、グロコーサ、アルコール等の原料として需要が非常に多い。

タバコの栽培

タバコもミシオーネスの氣候、風土に適し、移住者が入植した当時、永年作物の収穫があるまでの間作作物として栽培するものが多い。その栽培面積五千町歩、生産高四百四十万キロに達する。生産統計を示すと（一九五八〜五九年度）

サルタ州 八、一〇〇、〇〇〇キロ

コリエンテス州 七、二〇〇、〇〇〇〃

フワイ州 四、七〇〇、〇〇〇〃

ミシオーネス州 四、四〇〇、〇〇〇〃

ミシオーネス産のタバコ、クリオーシ種の世界市場への輸出も次第に確実性をおびて来た。一九五七年度はすでに百八万四千七百三十二キロ輸出しているが、世界の生産國の質ならびに値段と照し合せて遜色なきものとしている。一町歩の製品収量は一千キロを標準としているが、二千キロに達するものもある。値段は一キロ十二ペソ乃至十五ペソで取引される。五月に苗床に播種、九月、十月に定植、十二月から四月までに収穫する。

大豆の栽培

大豆の栽培も政府がかなり力を入れて奨励したので、一九四三年度にはアルゼンチンの全州にわたってその栽培を試み、その栽培面積は緑肥栽培を入れて一万二千六百八十三町歩に達したほどであったが、幾多の試験の結果、現在では殆んどミシオーネスに限られている状態である。

ミシオーネスにおける大豆栽培の歴史は一九三七年度四町歩を播種したのに始まり、一九四二年には五百三十町歩を栽培して四百五トンの大豆を収穫している。その後、今日に至るまで五百町歩乃至千町歩を前後して来た。

一九五七年と五八年度の栽培面積は一千町歩で、その生産高はは五百トンに過ぎぬ現状であるが、一町歩から千二百キロ乃至千五百キロの収量がある。需要が非常に多く、国内消費のみならず、海外にまで輸出出来るので、栽培法の研究によっては将来性ある事業の一つと見てよい。

熱帯果樹の栽培

1. アナナス (パイン・アップル)

アナナスは熱帯アメリカの原産で、ミシオーネス州でも、イグアス、エル・ドラード、カイ

ングワス地区に多く栽培されている。生産統計を示すと、

ミシオーネス州 三、一一七、〇〇〇キロ

フォルモサ州 五五、〇〇〇 "

アルゼンチンの九十八%はミシオーネスで生産する。

2. バナナ

ミシオーネスでのバナナは、イグアスー、エル・ドラード、カンデラリア地区で栽培される。生産統計を示すと、

フワイ州 五、九〇〇、〇〇〇キロ

サルタ州 三、一六七、〇〇〇 "

フォルモサ州 一、九五〇、〇〇〇 "

ミシオーネス州 二六、六〇〇〇 "

右のごとくミシオーネス州の生産は全体のわずか三%の生産に当る。

3. パルタ (アボガード)

ミシオーネス州でのパルタ栽培はカイングワス地区で栽培されている。生産統計を示すと

サルタ州 一、三一七、〇〇〇キロ

フワイ州 五九三、〇〇〇 "

ミシオーネス州

三三〇、〇〇〇

フォルモサ州

一九、〇〇〇

ミシオーネス州の生産高は一五%にあたる。

なお、熱帯植物として、マモン、チリモーヤ、グァジーバなどもわずかではあるが栽培されている。

植 林 事 業

ミシオーネスは、土地の八〇%はうっ蒼たる原始林におおわれているが、植林事業もミシオーネスにおける重要部門の一つで、政府も力を入れている。

アルゼンチン最大のセルローサ製紙会社の工場は、ガルアペー移住地より八十キロの近距離にあり、プエルト・リーコにも製紙工場が新設される。プエルト・リーコは移住地に最も近く、僅かに二十二キロに過ぎない。

ガルアペー移住地は植林事業地として申分なく、土地は赤土で肥沃であり、気温と雨量は理想的といえる。樹の伸長は極めて旺盛で、ブエノス・アイレスなどでは想像も及ばぬ成長力を示している。

植林樹種として最も有望なものとして奨励しているのは、

(1) ユーカリ樹

(2) アラウカリア樹 (パラナ松)

(3) カリベア松

の三種類である。

1. ユーカリ樹

ユーカリ樹は濠州の原産種で、アルゼンチンの気候、風土に適し、いたる処で植林されているが、中でもミシオーネスは最適地といえる。品種も多数あるが、左の二種が最良種である。

Reucalyptus Saligna (サリゲナ種)

Reucalyptus Grandis (グランジス種)

定植六年目で第一回の間伐を行う。

2. アラウカリア樹

この種は実際は松ではないが、パラナ松ともいわれている。ブラジル国パラナ州及び亜国ミシオーネス州の原産である。苗を仕立てて定植する方法と、種子を直播して造林する方法の二つがあり、定植後七年目に第一回の間伐を行う。

3. カリベア松

北米種の松でミシオーネスの風土によく適し、伸長も旺盛である。

〔註〕 ミシオーネスの植林に關しては田中致好氏の記事を参照されたい。

畜 産 業

ミシオーネスにおける家畜の統計（一九五六年）を示すと次のごとくである。

牛	一七三、一八〇頭
馬	三九、四八〇〃
羊	一二、八三〇〃
豚	七五、三五〇〃

ガルアペー移住者のうち、マンジョカ、トウモロコシなどを広く栽培し、これを飼料として、養鶏、養豚業を営む者もあるが、これなど将来性のある事業の一つに加えてよいと思われる。

（筆者 賀 集 九 平）

ミシオーネス州の植林事業について

当州の植林事業は最初エル・ドラード地区のドイツ人の植民地において、ゼルバ・マテ茶や柑橘及び油桐等の植樹が始められ、その一部の小面積にパラナ松が植えられ、あるいはユーカリ樹もたまに植林されると云った具合にして始められた。大体、第一次大戦後入植した人々が一九二〇年前後より着手したのであった。

その後一九四二年には南米最大のセルロース社が原始林三万町歩を購入して、主としてパラナ松を、次いでユーカリ樹をもあわせて植林し始め、次第に確信を持つにつれて米國種カリバア、タエダ等の松類の育苗と植付けを開始した。いずれの樹種も主にパルプと製紙用材として、その工場の需要にあてるために植林されたのである。

私の会社では、一九五四年頃よりパラナ松を株間三米×六〇センチに播種造林し、その第一間伐を行なった。弱小樹、二岐木を間伐し剥皮して工場に積出して見た。十年より十二年生のもので、太いのは根廻り五十センチより、細いのは手筈の柄大のものを樹の本数の三十パーセントぐらい伐り、浅い土地では十六屯より、肥沃土では一町歩当り三十三屯の生材を工場に出荷できた。生の剥皮材一町歩当り平均二五屯位、時価屯当り八百ペソ工場渡しとなり、本年六

月よりは運搬費として各一秆米について屯当り三・五〇ペソが工場主の負担となり、ユーカリ材と共に支払いを受けることとなって遠隔地の出荷者は大助りである。

この事は植林事業に投資しようとする者には最も大切な事である。一例をあげて見ると、トラック運賃秆当り屯四ペソかかるとすると、オペラからセルローサ社工場まで約百八十秆あるので七百二十ペソとなる。松材八屯×八百ペソは六千四百ペソとなり、八屯重量の運賃は五千七百六十ペソで、差引六百四十ペソが手取りとなる。このように一屯につき八十ペソ受取る勘定では引合わないが、現在は、ユーカリ材の運賃はオペラから会社まで会社払いとなったので、荷を下して帰りに近くの晩生蜜柑を積み込んでボサードス市方面に運び一石二鳥の収益を挙げているのである。

現在は兎も角、ミシオーネス州の唯一のパルプ会社に生材を売り渡すこととなると、工場を中心とした百秆米半径内の地域が望ましい。ガルアペー地域は造林地としてこの点理想的である。工場までは八十秆米で、道路も良く、土壌は赤色肥沃であり、気温高く、年間雨量一七〇〇—一八〇〇ミリを示し、日本の雨量に似ているが、発育の旺盛なことは実に驚くばかりである。北海道の苫小牧地域にある王子製紙会社のトド松、エゾ松、トーチ等の造林材は六十年生より七十五年生に至って伐採されているのに対し、ミシオーネスではパラナ松、米国種エリオット松、こうようさん等は二十年より三十年生で全伐を終えることが可能である。

すなわち、三分の一の時日で日本国内と同様の造林の実績があがるのであって、こんな自然にめぐまれた土地はミシオーネス州とパラグアイ国及びブラジル国のサンパウロ州ぐらいのもので、実に世界有数の植林有望地であることがわかるのである。

ユーカリ樹

亜園政府の統制監理下にあつて新たに植付けることが制限されている。

当州最重要の産業であつた「ゼルバ・マテ茶」は一九五八年と一九五九年末にいたつてさらに各家族当り十五町歩の自由植付けのわくも締切られたので、今後当州に入植しようとする移住者は、別の植栽植物を求めらる必要がある。そこで、今後有望とみられるユーカリ樹について説明してみよう。

その特長を列記すると

イ、成長が迅速、旺盛である。

ロ、早く収入があがる。

ハ、むずかしい技術をあまり要しない。

ニ、二、三回以上も全伐しても発芽する。

この樹種は北亜全州より南部ブエノス州まで植林されているが、気温が零下五度以下にさがるところでは幼苗時代に寒害を受けることがあるので原産地オーストラリア全域と同緯度の地

帯が好ましい。ミシオーネスでも時により寒害を受けることもある。種類には、サリグナ、グ
ランシス、キルトニアナ、ミクロコリス、マクラタ、テレチコルニスアルバ等三十種類以上も
試植されているが、今あげたものがその代表的な有望品種である。

ユーカリ材の用途は、種々多様で、パルプ材として有用なことはすでに記述したが、その他
に次のような用途が挙げられる。

イ、十年以上の太い材はベニヤ（合板）板用として優良である。

ロ、板材として良好。建築、家具、製箱、製板等。

ハ、鉄条線張り支柱、電柱各種

ニ、パルプ及び製紙原料

ホ、薪炭としても良好

ユーカリ樹林造成法

先ず、一米巾の適度の長さの床を作り、その中に土を盛り周囲は十糎ぐらいの高さの小板囲
いをして充分灌水をし、ウスプルン、ディタネ七八、バパン $1/100$ 、又は濃硫酸 $3/1000$ 溶液等を以てよ
く消毒して、次の日に細砂を混ぜた種子を一米平方に七〇グラムの割合で撒播し、種子の隠れ

る程に細粉土をかけて置き、床上には雨と日光の直射せぬよう覆をすれば十日前後より発芽を始める。四、五十日間、覆で直射日光をさけ、時々細霧を灌注すれば四、五葉となるから、逐次移植小箱か鉢に移植して別の床に並べ、三、四十糎の高さの時に本畑に定植するのである。

定植の距離は二米×二米、二米五〇×二米五〇、三米×三米等。

定植前一、二カ月間に蟻を完全に退治しておくことが必要である。

定植の適期は四、五、六月と八、九、十、十一月中の地中に湿度が充分ある時に、二十糎の深さの小穴に鉢とともに植付け、周囲の土をよく踏みつけて置き、年内二、三度の除草をすれば、二、三米の高さに成長する。

播種から本植までに大体六カ月より十カ月位の期間を要する。現在、鉢植苗木の市価は一本二ペソ位。これで大体定植は終わる。

パラナ松

造林法 パラナ松は伯國パラナ州やミシオーネス州北部原産で、優良な材質を有しその樹勢、材質、葉つきの有様等は支那原産の「こうようさん」樹に類似している。種属は「もみ、(樅)」に近く、樹齡百三十年前後に達するものもある。よく発育した樹木では根廻り三米、直径一米以上にいたるものも稀ではない。しかも本末同大直立性で、下枝は自然に脱落し、頂端に傘を開けるがごとき形にて枝葉を残し、樹高よく四十米に達するものがある。その自然林相は闊る

も壯觀であり、世界中まれに見られる有用針葉樹でもある。

播種造林法と鉢植および土塊付移植法の三様式がある。この種子は一キログラム百四、五十粒ある。直播法は五月より八月末迄に地下四種の深さに種子を埋めておく。年二、三回除草を行ない、蟻も十分に殺しておかなければならない。

損失、枯死の小苗があれば翌年の冬に補再播、又は鉢物を以て補植を行なう。三カ年間は年三、四回の除草が必要である。以後は別表計算書を参照ありたい。

エリオット松

この種類は米國南部諸州フロリダ、ジョージア、ミシシッピー、アリゾナ等の高原、平原の兩地質に適して、自然に育生繁茂し、それ等諸州では人工植林も盛んに行なわれつつあった。北米原産地では春に苗圃に種子を条播し、一年間灌水を行ないつつ育生し、その冬か来年の春に根こぎした苗を移植していた。

ミシオーネス州でもこのような方法をとれないことはないと思われるが、前記のセルローサ社では全苗を鉢作りとし、それと翌年の冬と春とに定植している。

栽植距離

二米×二米、二米五〇×二米五〇、三米×三米、あるいはこれ等の折半法等が行なわれる。

南アフリカで行われている二米五〇×二米五〇植えが理想的と思われる。

パルプ用仕立てでは密植の方を利とし、早期に樹木を太らせるためには十年後より一町歩当り三百本内外とすれば太り方が早い。

なおエリオット、カリバエア、タエダ等の松の種類は三十年後に伐木の際、二三年間続いて松油脂を取ってから伐採すれば、さらに利益が増すことは自明の理である。

その他の有望松類

A カリバエア松

B タエダ松

C パツラ松

D 落葉松

E こうようさん

F 常緑セコイア

パラナ松(播種)造林見積表

(一ヘクタール当)

支出の部

第一年度

伐木、小枝切落とし、焼払い、小枝整理

二、三〇〇ペソ

道路、橋梁建設費

殺蟻農薬

尺取、標柱立

種子代、六〇kg×一八

播穴掘り三米×〇、六〇米

播種と覆土費

除草費(年四回)

小計

第二年度

除草費年三回

殺蟻等

再播又は補植

第三年度

除草年三回

補植費

第四年度

七〇〇ペ

九〇〇〃

三、〇〇〇〃

一、〇八〇〃

二〇〇〃

四〇〇〃

二、四〇〇〃

一〇、九八〇〃

一、五〇〇〃

六〇〇〃

六〇〇〃

一、五〇〇〃

三〇〇〃

下草刈り一回

七〇〇ペソ

第五年度——第六年度

下枝打落とし

六〇〇〃

第七年度——第十年度

第一間伐、剥皮、積上四三屯×九〇ペソ

三、八七〇〃

第十三年度

第二間伐

四、〇五〇〃

第十六年度

第三間伐一〇〇屯×九〇ペソ

九、〇〇〇〃

下枝打落し

一、四〇〇〃

第二十年 度

全伐剥皮一五〇屯×九〇ペソ

一三、五〇〇〃

合 計

四八、六〇〇〃

註 第一、第二、第三、間伐材の運送費は加算してない。

生材一屯、一籽米につき四ペソを普通とする。

第四全材にも上記の加算をする。

収入の部

第七十年度

間伐青材パルプ用

セローサ社工場へ運搬渡し四三屯×一、〇〇〇

四三、〇〇〇〇

第十三年度

同右、生材四五屯×一、〇〇〇

四五、〇〇〇〇

第十六年度

同右、生材一〇〇屯×一、〇〇〇

一〇〇、〇〇〇〇

第二十年度

全伐、生材二〇〇屯×一、二〇〇

二四〇、〇〇〇〇

収入合計

四二八、〇〇〇〇

支出合計

四八、六〇〇〇

手取利益金

三七九、四〇〇〇

附記

匪國製紙会社の収支計算表（一九五八年十二月五日）

第七年度収入

第一間伐三〇% 一六屯×八〇〇

一二、八〇〇ペソ

第十年度収入

第二間伐二五% 一八屯×一〇〇〇

一八、〇〇〇〃

第三十年度収入

九九〇本四五%三三〇屯

三三〇、〇〇〇〃

収入合計

三六〇、八〇〇〃

支出合計

一二七、五〇〇〃

差引利益金

二三三、三〇〇〃

註 これはエル・ドラード町のスチュエリン氏の一九三〇年度植林であつて、五米×五米の間隔であるので、間伐の利益は非常に少ない。

ユーカリ樹植林経営見積表

(一九五六—六〇年度)

(一ヘクタール当)

支出の部

第一年度

伐木、小枝切落とし、焼払い、枝幹整理

二、三〇〇ペソ

道路、橋梁建設費

七〇〇〃

殺蟻農薬

九〇〇ペソ

苗木鉢作物二六〇〇本

五、二〇〇〃

尺取、標柱立(五月)

五〇〇〃

植付費一〇〇本×二十六日

二、六〇〇〃

除草費年三回

一、八〇〇〃

小計

一四、〇〇〇〃

第二年度

補植費一〇%

五六〇〃

殺蟻費

五〇〇〃

第三年度

殺蟻費

二五〇〃

第四年度

下草刈と下枝打落とし

六〇〇〃

第六年度

第一回伐株二八〇屯×一二〇ペソ

切落、剥皮、積出

三三、六〇〇〃

第七年度

間引芽掻と草刈(四日)

五〇〇〃

第八年度

新芽と整理(二日)

三〇〇〃

第十二年度

道路、橋梁の補修

一、〇〇〇〃

第二全伐費四〇〇屯×一二〇ペソ

四八、〇〇〇〃

第十三年度

新芽掻取費(間引)

一、〇〇〇〃

第十四—第十九年度

道路、防火線整理

四、〇〇〇〃

第二十年度

第三伐株、剥皮積出四〇〇屯×一五〇

六〇、〇〇〇〃

合計

一六四、三一〇〃

註 この直接投資表にはパルプ用生木材の工場までの運送費は含まれていない。将来これを加算する必要
がある時もあると思われる。重量一屯一杆に付き四ペソを普通とする。

収入の部

第六年度

第一伐木剥皮積出（セルローサパルプ工場渡し）

二八〇屯×七〇〇

一九六、〇〇〇ペソ

第十二年度

第二伐木剥皮積出

四〇〇屯×七〇〇

二八〇、〇〇〇〃

第二十年年度

第三回皆伐四〇〇屯×八〇〇

三二〇、〇〇〇〃

合計

七九六、〇〇〇〃

註 この計算で収入はセルローサ社試験場での最良肥土で計算したもの故、浅表土、岩隙地、裁植法の巧
拙、種類の不純等により下廻ることもあるから平均して上記収入の半額と見れば確かである。

支 出

一、土地購入費	五、〇〇〇〃
二、雇い主、従業員の住宅、納屋建設	三、〇〇〇〃
三、従業員一人当り厚生費(二十年間)	二〇、〇〇〇〃
四、諸機器、役畜、車、購入積立金	三〇、〇〇〇〃
五、資本金子(年一〇%)	六、〇〇〇〃
合 計	六四、〇〇〇〃

(筆者 田中敦好 在薹四十年 ガラシーノ会社育苗部主任)

ミシオーネス州で日本茶を栽培して

アルゼンチン国での紅茶の輸入高が、約二百五十万キロであったのは、私が渡重した三十年前のことと記憶する。

私は日本から直接当ミシオーネス州に入植したが、気候の点で日本と大差ないので、確かに茶の栽培に好適地と思つた。というのは茶は温暖を好み、日本でも東京以南の地に育ち、台湾や印度などの熱帯地にはとくによく生育するので、当州も有望であると見通しをつけたのである。しかし、静岡県の田舎に育ちながら製茶の知識は何一つ持ち合わせがなかったので当初は少なからず迷わされた。

第一に茶の種子を手に入れることに腐心した。当時ブラジル国レジストロで岡本氏が茶園三十町歩を經營しているのを知り、同航の永富氏がサントス港で上陸したので、同氏と連絡をとり、茶の種子十五キロを買入れる事に成功した。その翌年、印度式の一本植として苗木を圃場に定植したがこれが日本人の茶栽培の初めである。

岡本氏の茶の種類は、日本種に似て葉は小さく緑茶には適していたが、紅茶には不向きであったので、紅茶用の種類を物色していた時、当州のロレットの農事試験場にある事を聞き、小量の茶実の分譲を得た。種類はアサミカ種（印度のアッサム種）で紅茶向きであるので、これ

を繁殖して、茶園を増植していったのである。

前にも述べたように、私は茶に関して無知であったが、実兄が福岡県農事試験場の紅茶製造試験所（黒木町）に勤務していたので、少しはおそわることがあった。

私ははじめ手採み紅茶を少量製茶して見たが、機械でやってみようと思いたった。そこで採檢機をさがしてみたが無いので、仕方なしに自分で製作することにした。早速、本の写真に出ている採檢機の構造を研究し、私自身の構想をまじえて、曲りなりにも出来上ったものが、粗末ながら、亜国における紅茶製造採檢機の第一号である。

人は私をパードレ・デ・テー（茶の父）などといってくれるが、実際には仕事は遅々として牛の歩みのように一向進捗しないことをはさしく思っている次第である。

当時、製造した紅茶を売るべくブエノス・アイレス市の某商店に商談を申入れたところ、もつと品質のよいセイロン茶でさえ五ペソだからという理由で買叩かれ、製造すれば必ず赤字が出た時代であったのである。

そこで一部を日本茶（緑茶）製造にかえる考えで「ホイロ」を築き、国立試験場の標準手採茶製法にもとづき手採緑茶の製造を開始した。当時花卉組合理事の口添えて初めて緑茶の取引が出来た関係から、現在も引続き同組合と取引している。銘柄は「羽衣」といい、なかなか立派だが、その名をばづかしめないような品質かどうか、自信の程は別問題。とに角少量ではあ

るが在亜日本人間に供給している次第である。

ミシオーネス州における紅茶の品質は、まだまだ改良の余地はあるが、生産量の急速な発展振りは想像も及ばない程である。それで生産が需要を上廻ったために価格の変動下落が甚だしく、一時は紅茶産業の将来に少なからず不安を覚えたが、輸出貿易への急転換が出来て大いに安堵した次第である。その遠因として、戦後アジアの政治変革があげられよう。ことに紅茶の主産地ジャワ、インド、セイロンなどでは生産面あるいは輸出面に変調をきたしたのだと考えられる。また一方一時混沌としていたアルゼンチン国内状況も一応落着き、為替関係が輸出を有利に導くなど、目下の紅茶の生産は増産に増産を重ね、資本家の投資額は驚異にあたいするものがある。

将来、茶産業は、輸出に重点を置き一層発展すると想像され、これ等の大工場、大会社に倍して日本の資本家が活躍されんことを希望してやまない。

主なる間作作物について

ミシオーネス州の原始林開拓地では、赤土であるか、黒土であるかまたは「トスカ」であるかで間作作物にも、適、不適が生ずる。赤土に栽植されることを前提として、たとえば、ゼルバ、柑橘、油桐、茶樹等永年作物が生産期に達するまでの間作作物を挙げると次の通りである。

- (1) タバコ、(2) マンジョカ、(3) トウモロコシ、(4) 大豆、(5) 黒豆、(6) 甘藷、(7) 馬鈴薯、(8) 玉葱、(9) 西瓜、(10) メロン、(11) トマト、(12) キウリ、など。

広い面積には先ず大豆と黒豆を植えるのが良い。これは相当量生産されてもその市場が大き。タバコも同じであるが、この場合乾燥場が必要になる。しかし、これは資金不足の時はい。ニヤ板の原料で簡単な乾燥場が小資金で出来る。

タバコの場合、一町歩を間作するのに五千本の苗を用意する。苗は五月頃播種し、九月、十月頃に移植するのだが、雨の多い年は十一月月上旬まで移植出来る。収穫は十二月から始め、三、四月頃までかかる。一応収穫されたタバコの葉をドブレ（上等）、ボエナ（中等）、ビット（下等品）と選別し、針金を茎に通して自然乾燥する。そして乾燥場が一ぱいになるまで行なう。乾燥したタバコは雨天の日にこれをぬき取り、一にぎり位にして同じタバコの葉でくる。

これを適当に積み重ねて置くのだが、発こうしないように注意する。収量は良くて一千キロ、

普通で七、八百キロ、価格は十キロが百二十ペソ内外であるから、よく作れば一町歩から一万二千ペソの収入があることとなる。

マンジョカは澱粉用か食用かで、その品種が異なる。澱粉用のものは、その用途が加工用であるので、澱粉工場が近距離の所にある場合は有利であるが、遠いと運賃が高つくのでどうかと思われる。食用として自家用に作る場合は、毎日の食卓に供されるほか、豚や牛などの飼料にもなり、一時期に収穫せずに翌年まで利用出来るという便利な作物である。

トウモロコシは、自家用の食料として、鶏、豚、牛、馬などの飼料となる。広い面積に栽培すれば市場に出荷販売することも出来る。

大豆は一町歩から千二百から千五百キロの収量があり、市価はキロ四ペソ七十仙である。黒豆は一千キロの収量があり、キロ十五ペソ内外で取引されている。

甘藷は自家用か家畜の飼料として作られる。

馬鈴薯は赤土より黒土で栽培するに適している。他州の馬鈴薯がミシオーネスに輸送されないときを狙って生産すると、非常に有利である。

玉葱も馬鈴薯と同じことがいえる。しかし、広く栽培することはどうかと思われる。市場がミシオーネスに限られているからである。そのほか西瓜、メロン、キウリ、トマトなども皆初荷として市場に早く出荷すると、思わぬ収入を得ることがある。

従って、入植者が間作物を選ぶ場合、作った生産物を有利に売り捌くことが出来るか、販路が広いか、どうか、あるいは収穫期の調整がうまくとれるかどうかを充分考慮に入れなければならぬ。収入がそれ程多くなくとも、販路が広く、出荷に制限されないような作物が安定性が多いので良いと思われる。

また、次のような事情も考えられる。移住者が入植して開墾した土地があまりに広くない場合、どうすれば多くの収穫をあげられるか。

七月から八月にかけて、一メートルの間隔にトウモロコシを播種する。そして十月から十一月に大豆を播く。すると十二月に入るとトウモロコシがみのるので、これを中間から手折って立てかけたようにしてやる。やがて大豆が成長して五月頃に収穫が出来るようになる。この場合トウモロコシだけでも、又は大豆と混作した時でも、除草の手間は同じで、二作をするというやり方である。今ブラジルでは盛んに混作されているが、そのやり方はマンジョカを植えてあとに黒豆を混作し、豆は十二月に収穫し、マンジョカはそれから発育するのである。

前にも述べたように、間作で生産した品物を有利に売り捌くには、優良な生産品を収穫すること、量を集めることが必要である。そこで共同出荷組合の設立が必要となり倉庫が必要となってくる。各自が倉庫を持ち、めいめい販売していたのでは費用が重なる一方である。生産物をまとめて、共同の力で販売するようにしたいものである。間作物だけでなく、マテ茶も紅

茶も、蜜柑も同じことがいえると思う。

(筆者 宮内寿 在並二十六年、ゼルバ農園経営)

坂田柑橘園をみる

坂田農場は、ガルアペー地区の入口よりパラナ河に向って一キロは行った所にあり、総面積五十七町五反歩、うち柑橘園十四町歩、セルバ園十町歩を耕作している農場で、経営の主体は柑橘栽培である。

私は一九五七年十月、初めてこの柑橘園を見たので、この度は二度目である。

坂田徳治氏は明治三十二年十二月（一八九九年）兵庫県で生れた。一九四一年パラグアイ国のコルメーナ植民地に家族同伴で渡航、棉作業に従事していたが、一九四八年八月に意を決してミシオーネスに新移住した。翌四九年四月国道第十二号線ガルアペー地区に三十町歩の土地を購入して、独立経営の第一歩をふみ出したのである。この地を選んだのは、パラナ河に沿った地は、温暖で霜害が少ないためで、ガラシーノ会社が売り出した最初の土地である。

一九四九年頃のミシオーネスの業界はマテ茶の栽培が統制されていた反面、油桐栽培の勃興期で好況に恵まれていたし、紅茶の栽培も将来性に富んだ新興産業として新植するものが多かった時代であった。

しかし柑橘方面をみると、一九四二年頃がミシオーネス柑橘の最盛期でナランハ（オレンジ）が十一万トンの生産高を示していたが、一九四三年頃より根腐病（トウリストレーサ）のまん延

で枯死するものが多く、柑橘園を経営していた二、三の邦人も失敗し、やがて、一九四九年にはミシオーネスのナランハの生産高は四二年のわずか四分の一の三万トンにも達せず、邦人先輩にも柑橘栽培の将来に対し悲觀をとなえる者も少くなかった。

こういう時代に、年来の希望であった柑橘栽培であったとはいえ、同氏は油桐も紅茶もつくらずに、柑橘栽培に着手した達見に対し頭が下る思いがする。

先輩の真似をして金もうけをするのは誰でもする。しかし、自己の信念により、研究調査と、努力による未知の世界の開拓こそ、植民者に与えられた使命でないだろうか。

一九四九年頃は、根腐病の正体がわかっていなかった時代なのに、同氏は砧木としてトウリフォリア砧（カラタチ）をえらび、栽培品種の多い中にミシオーネス特産品種カルデロン種をえらんだ。この手腕は専門家以上のものといってもよいだろう。

はじめ、苗木の養成からとりかかり、翌五〇年に初年度として五町歩の原始林を伐採開墾して植付けた。苗木の足りぬ分だけは苗木商から購入した。栽植距離は七米×七米で一町歩二百本である。

柑橘の砧木としてトウリフォリアタのほか、ドウルセ砧（スフィート、オレンジ砧）も用いているが、兩種の砧木の優劣を比較して、つぎのように説明している。

トウリフォリア砧に接いだカルデロン種は隔年結果が少なく、果実も良質で、ハダの美し

い果粒も揃い、寒さにも強い。ドウルセ砒のものは、樹の成長は旺盛で深根性であって、隔年結果の弊が多く、果実のハダも悪い。粒そろいもなく、寒さにも弱い。

また肥培管理をみても、株間を馬耕するのと、草生にするのを比較すると、馬耕によるとシオーネスの気候からいって土地を不良化し表土を流失するから、地力の保有という点からいえば、草生の方がよく、とくに緑肥作物の方がよいと思う。

病虫の防除に関しても、機械油乳剤、石灰硫黄合剤、パラチオン、硫酸ニコチン、ボルドウ合剤など年二回―三回撒布して、介殼虫、レブラ、エスプロシバ、スス病、ソウカ病などの防除に万全を期しているので、アルゼンチンで一般に見る黒いナランハなど少しも見受けなかった。

販売はブエノス・アイレスからくる果物仲買人に、千個の値段を定めて園内で売り渡すので、選果、荷造、輸送などの手数がはぶける。

次に坂田柑橘園の一本当りの結実数を示すと。

樹令	最高個	平均個	最低個
四年	二〇〇	一二五	五〇
五年	四〇〇	二〇〇	二〇〇

年	個	個	個
六 年	四五〇	三五〇	二五〇
七 年	七〇〇	五〇〇	三〇〇
八 年	八〇〇	六〇〇	四〇〇
九 年	一〇〇〇	七五〇	五〇〇

で十年樹で平均一千個の果物が収穫され、成木に達するには十年から十二年かかる。

今年の平均値段は、一千個の晩生オレンジで二百ペソ内外を標準とした。

私はこの四、五年の間はかなり広くアルゼンチンの柑橘園を見てあるいたが、前よりよくなっていたという園はごく少なかったにも拘らず、坂田園は二年前より肥培管理も行き、みごとくに生育し結実しているのであった。

坂田氏一家は、ごく少額の資本で柑橘園をはじめられ、十年の成績は上述の通りである。柑橘は十年頃から隆盛期に入るのであるから、これから十五カ年の隆盛期を思えば、坂田父子の業績のあがるのもこれからである。私は筆を擱くに当って坂田父子の活躍を祈ってやまない。

四百家族入国許可の経過について

わが亜国拓植協同組合は、拓植事業推進のため、移住者導入とその営農指導保護を目的として、今から足かけ八年前に創立されたのである。従来、日本人に対しての入国許可は、原則として近親の呼び寄せか、又は、移住届が認める特別の事情がなければ下付されなかった。集团的移住者の入国許可取り付けなどはすこぶる困難で、到底望み得ないというので、組合はミシオーネスに土地を購入して亜拓直営の農場とし、これを呼び寄せの母体にして、たとえ少数づつでも許可の取り付けを行い、目的の一部を果そうという考えのもとに、その準備計画を進めていたのであった。ところが、ある日ミシオーネス在住日本人元老某氏の紹介で同地に広大な土地を有し、いろいろな事業を営んでいるG氏が組合を訪れて、是非日本人に土地を分譲したい、そこに日本人植民地を建設してどうか、日本人植民地が実現すれば同地方の発展に寄与することになる。先住日本人の同地方における発展振りは素晴らしい。その実績からしても日本人の将来における期待は大なるものがあると讃めたたえるのであった。

日本人植民地建設はもとより大いに望むところであるが、果して亜国政府が日本人に対して計画集団移住者の入国許可を与えるかどうか、これが重要な先決問題であると述べたところ、

地主G氏は、政府要人と昵懇であるから許可取り付けに成功するよう極力努めるゆえ、とにかく申請をされよと非常な熱意を示されたのであった。組合理事会においてはこれを慎重に協議の結果、当って砕けるというわけで、申請することに決定した。この旨を時の井上大使に報告を兼ね同意を求めたところ慎重な大使は甚だ困難な業であることを想像し、同意することになり難色を示めたのであったが、吾々の熱烈な要望に応じて遂に同意し、添書することを承諾されたのであった。

一九五六年五月九日、当時の亜拓組合長片山良平と、幹事郡十太郎兩名の署名した、計画移住者導入計画書をたずさえて、当時の在亜日本大使館付き参事官佐藤崎人氏と同道、移住局に出頭し移住局長に提出した。

提出した書式の内容は大体次の通りである。

(1) 日本は、人口過剰で仕事が少ない。

(2) 亜国拓植協同組合は、ミシオーネス州カインガス郡ガルアペー村に一万町歩の土地を購入して、一家族宛二十五町歩を割り当て分譲する。それがため家長夫妻と実子三十四人で構成される四百家族を入国させたい。

(3) 土地購入費や、移住者導入に要する費用、あるいは植民地における施設、就働に必要な物資等は、組合が「海外移住振興株式会社」から融資を受けてやる予定である。

(4)土地の開發については伐採に引続き、製紙原料や製材用に役立つパラナ松、その他の種類の植林を主として行う。また、柑橘類や、ゼルバ・マテ、紅茶等を栽培する方針である。

(5)学校、診療施設については、同地にある施設を有効に利用出来る。

(6)四百家族導入については、在日亜国大使館の指示ならびに当移住局の法令に従うものである。

もしこの申請による入国許可が下付されるならば、辺地における開發によって、農産物の増産が期待され、非常に貢献するものと思われる。

右の如き願書提出後において亜拓組合理事一同はこの念願が達成されるよう、最善の努力を払うことを申しあわせる一方、在亜日本大使館とも常に緊密な連繫を保って、当局と折衝をはかることを約し、亜拓組合幹部は、時には井上大使と時には佐藤参事官、領事などと同道して、内務省にあるいは農林省に大臣を訪ねた。また時には陸軍省に（ミシオーネス植民建設予定地はブラジルとパラグアイ両国々境にある関係上）また時には移住局などからの出頭を求められ質問に答える等、可なりの努力が払われたのである。

政府当局はわれわれの申し出に対して常に好意的で、しかも真面目に取りあげてくれたことは望外の喜びであった。成功は非常に困難と思われたわれわれの願いが容れられ、願い出て九カ月の後、即ち一九五七年一月十一日付けを以て遂に四百家族入国許可書が下付されるに至っ

たのである。

前に述べた地主G氏は約束通りあらゆる面において便宜をはかり努力をしてくれたことを特に付記しておく。

許可書の内容は左の通りである。

(一) 四百家族の入国許可をする。家族の構成は、夫婦と子供三人までで、その年令は二十才を超えてはならない。

(二) (三) 移住者入国に就ては、移住局の法令指示に従うこと。

(四) 入国を許可された四百家族は、一年に各一州宛八十家族を限度とし、同州内に四十家族宛の二カ所の植民地とする。

因移住局は、何時でもこの計画方針の不履行を認められた場合は、この許可を取り消す。

(六) 先ず最初に四十家族の入国を許可し、ミシオーネス州に入植すること。

(七) 並折組合は、百八十日以内に農場開発計画案を国立森林局の認可を得て提出する義務がある。

右許可書(移住局第四十八号)は、一九五七年一月二十二日に公式文によって組合に通知があった。

当組合においては、右許可書を検討の結果(一)と(四)に記載されている家族構成条件の緩和と、

各州における八十家族を二分し（即ち四十家族宛）、これを二カ所に分散せしめるとある点を、一カ所に八十家族の入植を認められるよう改訂方を申請することに決定し、一件書類を提出したところ、一九五七年八月二十七日付け移住局第一九九一号を以て願の通り許可が下付されたのである。

その内容は次の通りである。

(一) 家族の構成は夫婦の外、子供五人まで二十五才を超えないこと。

岡各植民地の集団は、八十家族までを認める。

一九五七年八月三十日付けを以て、公式通知を受け取った。

そして、この許可書が下付されて以来、昭和三十四年十二月十五日までの約三年間に、二十

六家族が入国したのである。

現在までの入国状況は次の通りである。

第一回	昭和三十四年四月十八日	チサダネ号		四家族	
第二回	同年	五月十六日	テゲルベルグ号		一家族
第三回	同年	六月七日	さんとす丸		五家族
第四回	同年	六月十七日	ルイス号		四家族
第五回	同年	六月二十九日	あふりか丸		二家族

第六回	昭和三十四年七月十六日	チチャレンガ号		二家族
第七回	同年 十月七日	テゲルベルグ号		五家族
第八回	同年 十月三十一日	さんとす丸		二家族
第九回	同年 十二月十五日	アルゼンチナ丸		一家族
		合 計		二十六家族

(筆者 片山良平)

ガルアペー移住地の現状

一、ミシオーネス州の特異性

ガルアペー移住地を紹介するには、まずミシオーネス州の特異性を説明する必要がある。ミシオーネス州は、アルゼンチンの北東端、盲腸のように突き出ているところで、他の諸州のように一望万里というようなパンパスとは全く異っている。中央にミシオーネス山脈が走り、州境の北側はパラナ河、南側はウルグアイ河と、両河川の間に狭まれ、北の端には世界一のイグアスの滝がある。全州赤土地帯で、パラグアイやブラジルと同一の地質である。

スペイン統治時代には、この僻地にジェスイット派がインディオの教化に努めたが、政策の変更により、独立後は直轄州として殆ど顧みられなかった。

日本人の入植は、今から三十有余年前になるが、亜国政府はミシオーネス州など全く見向きもしなかった。今日では同州屈指の産業都市として注目されているエル・ドラード、プエルト・リコでさえも、昨年（一九五九年）漸く創建四〇周年記念祭を催した程度である。またミシオーネス州開発は、ドイツ人、スイス人、ポーランド人のような北欧系、および日本人がその第一頁を飾ったといっても過言ではない。エル・ドラードの創設者シウエルの伝記を読んでも、また日本人の最初の入植者帰山、蒲田氏等の話を聞いても、道なき原始林を毎日何十里

と踏破し、人跡未踏の官有林に鋸を入れたものであった。

なるほど、このミシオーネス州には、有毒蛇もいる、プーマもいる、うるさいブヨもいる、亜熱帯のこととて暑さは暑い、というような悪条件はあるが、作ったものは何でもよく出来る。州でシエルバは、パラグアイ、ブラジルからの輸入品ときまっていたのが、ミシオーネスで作ればどしどし生育する。雹や霜の害も大したことはない。それに雨量は、年間一五〇〇ミリ以上もある。小川にはさらさらと清い水が流れていて、飲料水に不自由はない。建築用木材は、焼き捨てる程あるのだから、簡単に家は建てられる。一文なしでも何とかやっけて行ける点に、ミシオーネスの特色がある。他の州の例にあるように、ランゴスタ（イナゴ）の襲来で、何から何まで青いものは一切喰われてしまうような悲劇もなかった。旱魃の心配もない。土地が起伏しているから、洪水の憂いもない。

そのうちに第二次世界大戦となつて、東洋との交通が杜絶すると、他州でいくらか試作しても育たなかつた東洋の特産物である茶、大豆、油桐が、ミシオーネス州の特異な赤土に適して、ミシオーネス州の新産業として発達して来た。誰もがいうことだが、「ミシオーネスは、作れば何でも出来るから不思議だ」と。

今後、日本人の集団移住者により、新しい農法が行われ、新しい産業が興って来ることは、大いに期待されることである。

二、亜国政府の政策

最近、亜国政府も僻地開発に注目し始め、特にミシオーネスの製茶業に対しては、州政府においても力瘤を入れ、優秀な品種の栽培を奨励している。欧米諸国への輸出品として、ミシオーネス産茶の進出する時期も遠からず来ることであろう。ただ、今のところ政府は財政的に豊かでないので、十分な援助を行っていないが、州憲法が制定され、三月二七日の州知事選挙が終った後、ミシオーネス州が完全な州として干渉使の手を離れた暁には、大いに発展の余地がある。

三、ガルアペー移住地

日本海外移住振興株式会社が、アルゼンチンにおける最初の集団移住地として購入したガルアペーは、ミシオーネス州首都ポサダス市から、国道一二号線にて一七五軒の地点にあり、面積三一〇町歩、これが一〇〇〇ローテに分割されている（一ローテ約三〇町歩）。北はパラナ河、南は国道一二号線に沿い、南北約一〇軒、東西約四軒、殆んど全面積原始林に蔽われている。

一九五九年四月一八日、オランダ船チサダネ号で第一陣入植者四家族（二二名）が、ブエノ

ス・アイレス港に到着、当時エントレリオス州に大洪水があり、鉄道不通のため、不便窮屈な船旅を一週間以上続け、やっとポサーダスに到着、ちょうど労働祭に当る五月一日、アルゼンチン最初の集団移住者としてガルアペー移住地に入植した。その後も引続き移住者が到来し、現在までに合計二六家族（一三九名）が入植しているが、入植予定数八〇家族に達するには未だ時日を要する。

移住者の入植が遅れたため、当初の営農計画において主作物とされていたジェルバ・マテの栽培は変更の止むなきにいたったが、何を作っても良く出来るといわれるミシオーネス州の特性からして、別段困ることは全くない。亜拓においても、柑橘類や茶を主作とする営農計画を研究中であるから、今後の営農指導に宜しきを得れば、何等の危惧もない。

四、移住者の現状

第一次入植者は、土地の選定を終えると直ちに簡易な掘立小屋式住居を建て、二乃至三町歩の開墾を始めた。人によって多少のジェルバ・マテを植えたが、大部分は自家用の野菜やたばこ、とうもろこしを蒔いた。同時に牛や馬を買入れる人もあった。

第二次から第五次までの移住者は、入植時期が雨季に当たったため、伐木はしたが山焼きが出來ず長期間収容所に滞在するの止むなきにいたったが、昨年一〇月、やっと山焼きを終り、と

うもろこし、マンシロカの植付を完了した状態である。また、第六次以降第八次までの入植者は、漸く山焼を終えた程度である。

一戸当り開墾面積は、大体五町歩、中には一〇町歩以上も山伐りを行なった人があるが、如何に労働力があっても、第一年目に五町歩以上開墾すれば除草に追われ、十分手の廻らないことが多いから注意を要する。

目下移住者は準備時代であるが、やがては、各戸その作付方針を定め、本格的営農に入ることとなる。

五、造成工事

移住振興会社の造成工事については、昨年十二月、ブルドーザーによる道路工事を完成し、目下グレーダーによる仕上げ工事を実施中である。

道路は、国道二二号線より約一〇軒にわたり、A号線がパラナ河のフェルト・ペスカドールまで直通し、対岸パラグアイ国を一衣帯水のうちに望むことが出来る。また、現在入植者の入っている各ローテを繋ぐ道路は、四号線と六号線、今後の入植ロッテに対しては、七号、八号、九号、及び五号線道路が通じているが、これらの道路はグレーダーを通すことによつて一段と良くなり、入植者の一日も早く到着されんことを待っている。橋梁もほぼ完成しているの

で、今後の移住者には非常な便宜がある。

六、移住者の日常生活

雨季入植者は、当初雨のため相当作業が妨げられたが、天候の回復とともに、夫婦打揃って毎日自分のロッテで一生懸命営農にいそしんでおり、日本のように近所隣りに対する気兼ねもいらず、一家の円満振りは実に美しいものである。

子供の教育は、州立学校が日本の補助金により建設されるまでの間、外人教師が寺小屋式にスペイン語教授を行なっているが、子供達は、雨でも降らぬ限り、五軒、六軒の遠方から、徒歩又は、乗馬で通っている。喧嘩する子もなく、泣く子もなし、嬉々としてスペイン語を学んでいる。

食生活は、未だアルゼンチン風になじんでいないが、何分ミシオーネスは他の州と違って牧畜州でないから、牛肉が高く、入植者は、山の幸ともいうべき野禽、野獣を捕らえて肉の補いにしている。野菜は、先きに入った人が、後から入った人に、順繰り贈与して、相互扶助の美しい情景を展開している。買物は、月一回買物デーを定めて、約二四軒離れたフェルト・リコ市まで、トラックで買出しに出かけている現状であるが、やがて言葉も判り、慣れて来れば、バスに乗って独り自由に買物に行くこととなるらう。

移住者にとっては、未だ入植後一年を経たばかりであり、何かと不自由なことと思われるが、別段不満もなく、着々と自己の生活設計を築きつつある現状である。

(筆者 今井紹雄 日本海外移住振興株式会社 ブエノス・アイレス駐在事務所長)

ガルアペー移住地営農のすすめ方

この移住地に入植したなら、どういふような仕事からはじめ、どんな作物を作り、どんな具合にやって行けば、どれだけの利益があるかということとは、移住者にとって一番の関心事である。

次に、営農のすすめ方の大要を述べて、移住者諸氏の参考に供したいと思ふ。

営農のすすめ方は移住者の家族構成、資金、入植時期等により夫々異なるし、又移住地の諸条件及び市場の状況の変化につれて変つてくるので、弾力性に富むものであるべきであるが、移住者に一応の営農の指針を与えらるとともに移住地の将来の姿を予想するために、ここでは次の前提により標準営農類型の概要を示すこととする。

前提条件

配分面積 三〇ヘクタール

家族構成は五人とし、稼働換算二、五人とする。

入植時期は六月末と仮定する。

一、開墾は雇用労働者により人力焼畑式で行い、

初年度 五ヘクタール

第二年度 三ヘクタール

第三年目以降毎年二〜三ヘクタールづつ開墾し、十年目には全部開墾が終るものとする。
 二、経営内容は、当年開拓地へは陸稻、大豆、トウモロコシ、マンシヨカ、煙草等の一年生作物を、その後地へ柑橘、ブドウ、紅茶、油桐等を作付けし、順次、永年作物作付面積を増す。

区分	土地利用計画	
	一年目	完成時(十一年目)
煙草	一、五ヘクタール	ヘクタール
陸稻	一、〇〃	四、〇〃
大豆	一、〇〃	〃
トウモロコシ	一、〇〃	〃
マンシヨカ	〇、五〃	五、〇〃
柑橘		二、〇〃
ブドウ		五、〇〃
油桐		三、〇〃
茶(紅茶)		一、〇〃
植林(ユーカリ、パラナ松)		〃
宅地その他	二五、〇〃	〃
未墾地	三〇、〇〃	三〇、〇〃
計		

入植第一年目及び完成時（十一年目）及び土地利用計画は前表のとおり（中間年度のものは省略）である。

イ、煙草作は当地における有望な換金作物であるので、家族労力が多く、営農資金の豊かな

ものは作付面積を拡大して、営農安定を早めることが出来る。

ロ、当地方では、柑橘、ブドウ、紅茶、油桐を適宜配することが望ましい。

従って前表中柑橘の作付け面積を更に増加する営農形態も可能であり、考慮に値する。

ハ、入植に際して必要な資金は四〇〇、〇〇〇円となつてはいるがその内訳は次の通りである。

農業 経 営 費	八三、〇〇〇円
生 活 資 金	九〇、〇〇〇 "
建物(住宅、農舎費)	一二三、〇〇〇 "
開 墾 費	三四、〇〇〇 "
農 具 費	一〇、〇〇〇 "
第一年経費の一部	六〇、〇〇〇 "

三、完成安定時の永年作の収益は次表のとおりである。

区分	作付面積 ヘクタール	ヘクタール当収量	総収量	単価	金額
柑 橘	五〇〇	一、二〇〇 個	六〇〇、〇〇〇 個	〇、二〇〇	一、二〇〇、〇〇〇
ブ ド ウ	二〇〇	一〇、〇〇〇 キロ	二〇、〇〇〇 キロ	三、五〇〇	七〇、〇〇〇
茶 (紅茶)	三〇〇	生葉 二、五〇〇 カラ付き 六、〇〇〇	七、五〇〇	四、〇〇〇	三〇、〇〇〇
油 桐	五〇〇	六、〇〇〇	三〇、〇〇〇	二、〇〇〇	六〇、〇〇〇
計					二八〇、〇〇〇

一ドル〇八二ペソ
一ペソ〇約四円四〇銭

イ、この他、短期作物及び養豚による収入があるので総粗収入三一八、〇〇〇ペソとなり、
 経営費六五、〇〇〇ペソを差引いてもなお年間二五三、〇〇〇ペソ即ち邦貨一、〇〇〇

〇、〇〇〇円以上の農業所得を安定的に確保することが出来る。
 ロ、又、ユーカー五ヘクタール(伐期五と七年)、パラナ松五ヘクタール(伐期十二年)で
 相当の収入が得られ、年平均として約五〇〇、〇〇〇円の収入を見込むことが出来る。
 四、完成安定時にいたるまで、土地代の償還はもとより、渡航費、現地融資の償還は充分可能で
 あり、マテ茶にかわつて柑橘栽培を中心とした当移住地の営農は非常に明るいものがある。

ガルアペー移住地の実態アンケート

邦人移住者が、ガルアペー移住地に入植したのは、一九五九年四月十八日にはじまり、現在では二十六家族百三十九名が入植している。これらの移住者のうち、早い人は原始林を伐採し、山焼もすんで、植林をした人もあり、マテ茶を定植した人もいる。ミカンの砧木を育成中の人もあり、椎茸の試作培養中の篤志家もあり、養蜂に力を入れている人もある。間作作物として、とうもろこし、タバコ、大豆、マンジョカ芋などを植えている人もいる。

実際、ガルアペー移住者の実態はどうか

左記の各項について、各移住者に意見をもちめてみた。

1. ガルアペー移住地に入植した時の感想
2. 現在の感想
3. 永年作物に何を選ぶことにしたか。
4. 間作作物に何がよいと考えているか。
5. 将来に対する希望、計画、抱負。
6. これから移住を希望する日本の方々へ贈る忠告、助言はなにか。

× × × × × ×

左に回答者の全文を發表して參考に供する。

× × × × ×

古 庄 定 氏

(古庄氏は一九五九年四月十八日来連 第一回移住者 熊本県人 家族五人)

1. ガルアペー移住地は、アルゼンチンの最東北端にあり、亜熱帯で人口少なく広大な原始林地帯で思ったより交通の便もよく、一般農作物は手数のかからない永年作物で、特に蜜柑などが大面積に栽培されている。また、ゼルバ・マテ茶、パラナ松などがあり、ここは私共移住者にとつては天国で、子孫のために好適地と思っております。特に先輩諸氏の良心的指導には感心しました。

2. 今後の日本民族発展のためと思い、また自分の子孫が気持ち良く住めるように基礎工事を思い、昨年(一九五九年)十町歩(ヘクタール)の土地を開拓してゼルバ樹を植え、間作にとうもろこし、マンジョカ芋、落花生、大豆、小豆などを植えて将来の大成にそなえており、また、先輩の足跡を手本にして私なりの独自の道を歩みたいと思う。

3. 第一にゼルバ、第二にユーカリ樹、第三にパラナ松、蜜柑は今のところ一町歩程度を目標としている。第一段階として比較的手間のかからない将来確実性のある事業として植林を選んだのです。少人数で大面積を経営し、また亜国のパルプ資源地帯として、当ミシオー

ネスより外に適地がないので、当ミシオーネスの植林事業は最も有望と思ひ右の種類を選びました。

4. 先ず、これは各自の事業経営方針により異なるものと思ひますが、私の方針は農業という職業は土に生きること、都会より遠く離れた未開地こそわれわれ移住者を待ち望んでいる所なので、第一に自給自足体制をとって事業に着手しなければなりません。特に私共のように限られた資本で事業の経営をせねばならぬ移住者は、もうかることより、余計な出費を出さないという事業方針で行かないと、一センチポの収入も得られない現状です。従つて、とうもろこし、マンジヨカなどを植え、家畜を育てて油や肉を自給し、砂糖キビを植えたり、蜜蜂を飼つたりして自給し、塩、石油など他の日用品を賈う程度にとどめるという方針で進むつもりです。大豆、小豆なども食糧の自給を期し、また土地を肥やし雑草の繁茂を防ぐという狙いも含めてかなりの大面積に栽培しています。また換金作物としてタバコなど有望だと思ひます。

5. 自給自足の生活方針で進み、永年作の植林を育て、漸次事業を拡張し重國に尽したいと思ひます。また個人として重國に帰化し、出来得れば子孫も国際人として白人系との結婚を考えたいと思ひます。

6. 狭い四つの島々に、数年後には一億の人口になるであろう日本で、いつまでも安易な夢を

見ているより、今のうちに快よくわれわれを受入れてくれるアルゼンチンのパラダイス、ミシオーネスに移住されるよう要望してやみません。アルゼンチン大陸は広くて肥沃です。一人で多くアルゼンチンに渡航されんことを希望いたします。

菊江 継三氏

(古庄氏と同船 第一回移住者 広島具人 家族六人)

1. 将来性のあるよい所と思いました。
2. 現金収入のないのに困ります。
3. ゼルバと植林を選びます。
4. トウモロコシ、マンジョカ等。
5. 植林を実行して、機械化農業の実現を望んで今後努力を続けてゆく考えています。
6. 人口密度の多い日本にいるよりも、肥沃な広大な土地がアルゼンチンに待っています。ためらわずに大いに進出されることを希望します。

福田 半次氏

(一九五九年五月十六日來亜 第二回移住者 福岡具人 家族四人)

1. 日本で想像した通りの移住地である。
2. 将来のことを思えばやはり来てよかったと思う。

3. 植林のみ。
4. タバコ、マンジョカ、トウモロコシ。
5. 植林して金が入るようになり、落着けば土地を購入して広範囲に植林したいと思う。
6. この入植地は、気候もよく、永年作だから将来のことを思う人は、この植民地にかぎると思う。

伊藤 昌吉氏

(一九五九年六月十七日来函 第四回移住者 夜城県人 家族五人)

1. 日本で想像した程交通不便な所でなく、生活条件も割合良い所と思いました。
2. 外国に移住を決心した時から、アルゼンチン国を希望したことを、現在になり非常に良かったと思います。

その理由は、イ、土地が非常に良いこと、ロ、気候条件が良く健康地であること、ハ、交通の便が良いこと、ニ、集団移住であること、ホ、巫拵、土地会社等が側面より指導してくれること。

3. 蜜柑、紅茶、ブドウ
4. とうもろこし、マンジョカ、豆類。
5. 蜜柑を約十ヘクタール、紅茶二ヘクタール、ブドウ(ブドウ酒用)五ヘクタール、植林(

パナ松、ユーカリ) 約十ヘクタール等八年目か十年目で現在の一口ツテを完成する計画。
6. ガルアベ―移住地を是非ともすいせんします。

原田 左千夫氏

(伊藤氏と同船 第四回移住者 長野眞人 家族五人)

1. 割合に地形が悪いと感じた。セルバの植付ができないというので、何によって生活して行くべきか迷った。たのみにして来た亜拓の農場が草原でミカンの母木一本無いのには全くがっかりしました。

2. ミカンや植林その他によってやって行けるだろうと先に希望を持ち落着いて来た。

3. ミカン、植林。

4. マンジョカ、トウモロコシ、大豆。

5. ミカンの台木、母木の最良の品種を早く入手したい。ミカン十町歩、植林十町歩位を早く完成したい。それが完成出来たらもっと土地を多くしたい。

6. ミシオーネスはブラジルの野菜作りのように、はなばなくはないが、じっと辛抱することによって、必ず大きな希望が持てるだろう。

小池 悦人氏

(一九五九年 六月二十九日 来遊 第五回移住者 家族五人)

1. 原始林だということで、南方のジャングルを思つて来たところ、意外に平凡な森林であつた。しかし、又起伏の多いのにも驚いた。南米は平坦な広大な土地と予想し、又学校、診療所、農場等完備していると聞いて来たのだが、なに一つなく、家族の皆さんも最初の中は大変不便した。

2. 数カ月の間に山は伐られ、作物が伸び、家が建られて行き、又学校や診療所等も間近に出来る事を思えば、このコロニヤの発展も遠くない。住めば都というものか、前途に明るい希望が湧いて来た感がある。

3. 山伐り後の地形の状態によって、多少変更することもあるだろうが、大体半分をユーカリの植林、残り半分は良品種の蜜柑を植える予定。尚一部に油桐なども考えている。

4. マンジョカ芋は、主食の一部として約二町歩、その他は大豆、トウモロコシの間作を行ない養豚、養鶏の飼料とする。尚永年作の肥料として、将来は牧草の間作を考えている。

5. 現在の土地を立派な蜜柑園と植林とで一日も早く完成し、子供が大人になる頃余剰地を購入し、植林を広く行なう計画を樹て、ブドウの栽培を研究し、工場を一つ位もって、加工販売の面に伸びる事も考えている。

6. これから移住される方々には、日本での生活とかわりなく何もかも完備されている様に思つて来れば、不平不満も多くなる。新開地の不便を忍び、努力を惜しまぬことを覚悟して、自

から附拓に打ち込んで行く心がまえが必要であろう。

ガルアペー移住地は極めて交通の便が良い事を申添えます。

角田 弘三氏

(一九五六年 六月二十九日 来歴 第五回移住者 家族五人)

1. 山奥で学校もなく、その他日本で夢にえがいていたガルアペー移住地とは、大分違う。やはり日本が文化国家であり、日本人は日本で生活するのが一番幸いなのだとつくづく感じた。

2. 移住六カ月になり家を建て、作物を作り、永年作の計画をし、どうやら安定感をいさぐうになり、やはり来てよかったですと思います。

3. みかん、茶、植林。

4. とうもろこし、マンジョカ、豆類

5. みかん十町歩、紅茶十町歩、植林十町歩を植栽、育成して、七、八年にて完成したいと計画しています。

6. 真面目に働けば必ず安定した生活ができると思う。甘い考えの人は移住を中止した方がよいと思う。家財道具は安売りせずに持つてくること。

植松 岩雄氏

(一九五九年 十月七日 来歴 第七回移住者 長野県人 家族四人)

1. 収容所が倉庫のような建物なのでびっくりしました。思ったより山の中でなく、好感が持てましたが、ブヨにはまいりました。

2. 早く入植した人と心を合わせて永年作物を植え営農計画を樹てたらと考えております。先住者のロッチテを見学して、将来の作物の参考にしたいと思っています。苗および種子等の入手が一番心配になります。

3. ミカンとユーカーリ。

4. 黒大豆、とうもろこし、マンジョカ、稻。

5. 早く生活を安定させ日本人として恥ずかしくないように、又これが日本人だという所を現地に示す位の農民になりたいと思う。

6. 移住を希望する方は、あまり色々の小さい事にこだわらず、ドシドシ事を進めるべきだとつくづく思います。

徳田 実氏

(一九五九年 十月七日 来歴 第八回移住者 島取県人 家族六人)

1. 夫よにはがっかりした。その他日本からの話とはほぼ同じ。

2. 今日では心配した事はない。のんきでよい。

3. 植林、牧畜も考えている。

4. タバコ、トウモロコシ、マンジヨカ。
5. 明るい希望を持てると思う。植林、牧畜を計画。
6. 労働意欲の旺盛な家族、強固な意志をもった人でなければ駄目と思う。将来明るい希望が持てる。

南米に移住するなら、住みよいアルゼンチンをお奨めする。

ブエノス・アイレス入港から

ミシオーネス向け出発まで

移住者がブエノス・アイレス港上陸直前から、鉄道でミシオーネスの目的地に向け出発するまでの注意事項、並びに模様を参考までにお知らせする。

ブエノス・アイレス上陸の手続きは、モンデ・ビデオまで出張した検査官、移住官により船がモンテ・ビデオ出帆後、ブエノス・アイレスに到着するまでに検閲、並びに旅券その他の関係書類の検査が行なわれる。この検疫にはトラコーマが嚴重に調べられる。

税関荷物の申告は、航海中に船の事務長から渡される税関荷物申告書に自己の荷物の数量、内容を船艙及び船室に区分して記載する。申告書は、船の事務長から税関に渡され、移住者には荷物受取証が手交される。荷物受取証は税関で荷物の検査がおわるまで大切に保管して、検査の際、税関の荷物検査員に提示する。携行荷物の検査は、税関申告書に記載した荷物の個数と、検査を受ける荷物の個数が合致しなければならないので、船室荷物については特に注意して、個数が超過している場合は、下船前に二個を一個に括り合せ、不足の場合は一個を二個に分けて、申告書の個数と合致させる。下船の際携行を許される物は、書類入籠、ハンドバッグ

グ、及び手廻品等の程度である。船舶荷物は税関人夫によって構内の検査場に運ばれ、船室荷物は移住者自身で船から検査場に運び込むことも出来る。

荷物の検査を受けるに先だって、船舶並びに船室荷物の個数を照合し、旅券と共に荷物受取証を係の検査員に提示して、指定された場所に自己の荷物を運び、繩を解いて税関吏の検査を待つ。混雑する税関構内で短時間に荷物の解体作業を行なう事は容易でないので、移住者は荷作りの際このことを考慮に入れて、短時間に開梱出来るよう荷作りしておくこと。

内容品が外から見える枠組は解体する必要はない。移住者が携行を許された物品以外は、没収あるいは関税が課せられることになっているが、大型の機械器具、又は販売を目的とした悪意の密輸入品のはかは適当な処置により、大てい通関することが出来る。

荷物検査終了後解体した荷物は、再び以前にも増して嚴重に荷造りをしなおさなければならぬ。それは入積地まで鉄道あるいは貨物自動車による輸送のためである。

農業機械器具、車両などの無税通関に關して特に計画移住者に限り、自己が使用するものに対して無税通関の許可が与えられる。移住者にして標記の目的で農器具を携行する場合は、予め員数、品名、及びその特長、商標、製造者名、ソータ番号、動力等を海協連に届出ねばならない。また荷箱に番号を付して、内容品を明記しておく必要がある。

通関の許可を得た農器具は、五ヶ年間売却あるいは他に貸与することができない。この許可

条件に違反した場合は、規定された関税の他に罰金が課される。

船艙貨物又は船室荷物といえども、木箱等は汽車の中に持ち込むことが出来ないのので、運送会社に托して鉄道あるいは貨物自動車輸送とし、その他の小荷物は別に税関検査場から搬出、一応組合の事務所に保管して、移住者が乗車の際各自に引き渡す。車内に持ち込むことのできない荷物は、手荷物扱いとして無料托送する。この際の手荷物は大人一人当たり三十キログラムまでである。

貨物送りの船艙荷物は、移住者が現地に到着後約一週間位遅れて入手するようになるから、炊事道具並びに各自毛布、毛糸のジャケツ等を携行する必要がある。

フェノス・アイレス入港後、家長並びに作業可能な男子は作業衣を着て各自の船室荷物を検査場に運び、前記の通りそのまま検査に立ち合うが、婦女子は下船せずそのまま船内にとどまる。現地への出発は荷物検査の都合上、入港後三日目を予定、その間は宿泊費の節約のため、船内にて過ごし、同伴者があれば市内見物買物等に用かけることも出来る。三日目の昼食後下船、バスに乗って市内の繁華街を一巡して、発車駅であるウルキサ駅に至る。現在、汽車便が週に五回あり、出発時刻は日により多少異なるが大体午後六時三十分である。ポサーダス着は、翌々日の午前四時頃である。鉄道運賃は取扱料、運搬自動車料、鉄道運賃その他を併わせて、一キロにつき三ペソ五十センチポ位を見込む。円貨の換算率は一ペソ当たり四円四十銭程度である。

ミシオーネス州は運賃の關係上、特殊永年作物を栽培（主作）し、一年生換金作物は煙草を除いて余り植付けられていない。穀物の植付は自家用程度にとどまる。従つて現在のところ脱穀機、耕耘機、収穫機等の農機を携行する必要はない。携行品は改良された小農具（開墾鋤、鋤、鏟）大工道具一式、家屋の天井用にトタン板、野菜の種子、使用中の毛布、布圍は必ず持参すること。洋服を新調するよりも、むしろ労働服をなるべくたくさん持参されたい。高価なラジオ、写真機等は必要ない。

ミシオーネス州は天恵豊かな楽天地であるが、経済的に安定し、安住樂土を建設するために非常な忍耐と努力が必要である。原始林を開墾し、住宅を建て、食料の自給体制を整え、永年作物の植付け、収穫までには少なくとも、四、五年の年月を要するので、それまでに多額の資金が必要となる。これに備えて出発前は出来るだけ節約して、移住後の營農資金に振り当てるよう考慮することが大切である。

船がブエノス・アイレス入港と同時に海協連支部および組合の係員が乗船して出迎えるので、その指図によって行動すれば何等心配することはない。移住者はここまで来る間に色々移住地の事情を批判する人の話を聞くと思われるが、決して迷わされることなく、安心して移住地に向け出発することが賢明である。

（筆者 入江正治 戦前外務省農業実習生 在亜二十四年 亜拓理事 花卉園経営）

移住者家族に同行して

十月下旬といえばアルゼンチンでは初夏で、ブエノス・アイレス市の街路樹の中でも際立って美しいジャカラダの淡紫色の花も、そろそろ新緑の間に浮立って見え始め、一年中での最も好い季節である。

四日前に地球を半回りして当市に着いた移住者五家族が、希望と抱負に満ちて、永住の新天地であるガルアペー移住地に向かって出発しようとしている。

二日前の大雨も忘れたような初夏の陽が、ウルキサ鉄道の始発駅構内のトタン屋根にキラキラ照りつけている。

汽車の発車は十八時であるが、亜拓の職員の度重る経験と注意に従って、それより二時間も前から移住者の家族の人々はトラックから手荷物をドシドシ車中に運び込んでいる。

持ち込める限りの手荷物で車中は一杯になった。トランクあり、風呂敷包あり、網袋あり、和洋折衷の梱包も半時間位の間には荷物棚の上から座席の下、その他の空間に配置し終わって、みんな額の汗を拭きながら発車を待っている。

その頃になってドヤドヤと多数の乗客が入って来て、瞬く間に車内の空席は消えてしまつて、通路に立つ乗客の目が、何んだか先入した我々を羨ましげに見ているように感じられた。見送りに来られた亜拓組合長の片山さんを始め役員の人々も、あれやこれや職員に注意を与えておられる。旅行中の簡単な食事としてパン、ソーセイジ、果物等、亜拓の職員の人々が車内に持ち込んでいる。

五十余日の航海中、移住者の世話をされた看護婦さんも車内で奥さん達や子供達と別れを惜んで目を赤くしておられる。アルゼンチンの鉄道車両は殆ど三、四十年の老朽車で、日本では到底見たくても見られないほど古く、乗心地等という繊細な感覚を忘却したような車である。

それでも列車は一応一、二等車、寝台車、食堂車（二等乗客専用）、荷物車で十二、三両連結している。

発車直前、車掌が一シキリ笛を吹いた。見送りの人々から「お元気で御気嫌よう。」といえは車内から口々に「色々どうも有難うございました。」「さようなら。」と言ひ交わしているうちに、ガタンと一揺れして汽車は「汽笛一声」もなく動き出した。

駅にきて以来、移住者の幼い子供達の手をひいて、何くれと世話をしていた中国人の通訳さんの目にもキラッと光るものが見受けられた。看護婦さんも濡れたハンカチを高く振っている。

見送りの人々は、一様に移住者五家族の健在と多幸を祈る気持ちで一杯である。

別れを惜しんだ人々の姿が見えなくなった時、始めて移住者は遠い遠い国に来てしまったことを自覚し始めたらしい。

五十余日間の、のん気な楽しい船旅、プエノス・アイレス港税関でのあわたましい荷物検査等出發準備に過ぎた四日間が追憶されると共に、今始まった約一千キロの汽車旅行と、それから先百七十余キロをへだてる地点にある移住地、その後の生活のこと等が想い出されたことであらう。

子供達はうつりかわる窓外の異国の景色に全身の注意力を集中しているらしい。両親にあればなんでしょうと盛んに質問をしているが、草原を散歩する牛や馬のほかは適確な答えも出せず、マゴマゴして私の応援を求めてくる。プエノス・アイレス市とその近郊を離れて一時間もたつと、一望千里と遙ゆかないが、見渡す限りの草原と、その所々にポツンポツンと一塊りのユーカリ等の黒ずんだ森の輪廓しか見られない。思い出した様に農家と風車が見られる。牧草を喰む牛や馬の群が、ここかしこに点々としているが、人間の姿は殆ど見られない。極めて単調な景色である。子供達の好奇心も夕闇の迫ると共に薄らいで来て昼間の疲れでいつの間にかコクリコクリやっている両親と共にいねむりを始めた。車内の電燈もボンヤリ光っていた。

昼間の暑さに引換え、日没とともに大陸の冷気が車内に流れ込んできたのと腹が空いたのとで皆んな目をさまし始めた。車中で初めての食事である。夫々、サンドウィッチやソーセージ

パン等の包を開いて食べ始める。

私は食堂のボーイに牛乳や紅茶やコーヒーを持って来させて、皆んなの好みに従って配給させた。

満腹感とまでゆかなくても、一応胃の腑が睡気を誘発する位食べ終わった時分には、スッカリ睡り込んでいる子供もいた。ブエノス・アイレスから北へ約百キロ、パラナ・デ・ラス・パルマス河岸に在るサラテ市のフェリー・ボートの発着港の入口で汽車は停まった。二二時を少し過ぎていた。ここで列車はフェリー・ボートにうつされ約六十キロ河上の対岸イビクイ港迄遡航するのである。

上り列車の延着で小一時間も待たされたが、河面を渡ってくる冷風と周囲の静けさに旅行者は熟睡している。河の航行三時間は、この汽車旅行中での最も気持の良い静かなひと時であった。

イビクイ港は、ブエノス・アイレス州の北方に位するエントレ・リオス州（河に狭まれた州の意、即ち西側はパラナ河、東側はウルグアイ河が流れている）の南端にある。ここから汽車はエントレ・リオス州を四百キロ北上して、コリエンテス州に入り、殆どウルグアイ河に並行して更に三百八十キロ北へ走って、ミシオーネス州南部を約七十キロ通り、終点のポサーダス市に到着するのである。だからブエノス・アイレスからポサーダス迄の距離は概ね九百五十キ

口位である。

車外が明かるくなつた頃は、汽車はエントレ・リオス州の牧場や農場地帯を、ガタゴト騒音をたてながら走っている。

昨日の大雨のせいか畑の土が黒々と感じられ、砂塵が少しも立たないのは楽である。この辺の地勢は、河向こうのブエノス・アイレス州の平凡なのに引き換え、ゆるやかな起伏が何処迄も続いているのが、我々の目に何だか目新しい感じを与えた。

皆んな朝食をやりながら、窓の外を眺めている。子供達はそれも飽きると盛んに黄色い声で歌を唱い出したり、隣席の並居人の乗客と、船中で習った片言と手真似で会話をしたりジャレたりして楽しんでるから、退屈している風には見られない。

両親達は疲労しているのか、皆んな睡っている。それでも時々目覚めると、私と早水監督は家長達と色々アルゼンチンの風俗習慣や言葉に就いて話をしたり、又今後の抱負とかに就いて語り合ったり、あるいは先住者としての立場から参考となるようなことを述べたりした。早や正午も過ぎて、汽車はコンコルジア市の駅構内に入っていた。

コンコルジア市は人口七、八万人、この辺の中心都市で、ブエノス・アイレスから四百キロ北方にあつて、ウルグアイ河を距て、対岸のウルグアイ国のサルト市が目に見える。

私は四年前、休日を利用して、妻と二人で此の町迄ウルグアイ河を船で遊びに来た時、一二

家族の日本人が元気で働いておられたのを見て、感銘を深くしたことを想い出した。

私はフェノス・アイレスを発つ前に、一応汽車の発着時間を調べておいたが、この駅では普通四十分程停車することになっていた。

又汽車がフェノス・アイレスを発つてすぐ移住者の人々に、子供達を絶対に車外に出さないこと、車の連結部が被覆されていないから危険であること、窓から手や頭を出さないこと、停車中絶対に駅プラットフォームに降りないこと、手荷物を盗まれないよう注意すること等に就て訓示して置いたのである。

駅に着いてから、車掌に「何分間停車するのか」と尋ねたら、「約一時間延着しているから積々三十分位だろう」との答であった。皆んなにそのように伝え且つ車外に出ないよう念を擦しておいた。その時分には既に簡単な昼食も終わって車内の暑さに子供達も婦人達も半分ウツラウツラしていた。その中でも特にやや肥り気味の奥さんが横になって、いかにも気持良さそうに寝ておられるので、その御主人に「良くお寝みですね。お疲れになったのでしよう」と言い残して、私達は食堂車へ渡っていった。食卓について昼食の献立を見ている間に、例によって汽車は「汽笛一声」もなく動き出していた。それから間もなく三人の家長が、私達の横を通り抜けて先へ行くとうとしているので、大声で呼び止めたら「ここにおられたのですか、実は」と言つてモジモジしながら「大変なことになりました」と言うから、「どうしたのか」と聞き返した

ら「さっきの駅に一人残りました。」と答えたので、私は反射的に「大人か子供か。」と問い返した。「実は〇〇さんの奥さんです。」私は驚いたが、大人であったので少し安心した。さっきまで熟睡していたあの肥った奥さんがどうして居残ったのか了解に苦しんだ。三人は異口同音に「どう致しましょう」と聞く間に、私の頭の中では色んな計算が浮かんた。同時にこんな事が起らないように、出発直後もしさきほども、さんさん注意をしておいたのにと多少續にも触ったが怒ってみても汽車は逆戻りする訳でもなく、バタバタしても人騒がせになるばかりなので、三人の家長には「善処するから自分等の座席に帰るように」と言って、丁度ボーイが遅んできたスーブもその儘に、車掌を探しに食堂車を飛び出した。

車の動揺も激しい。通路に立塞る乗客の間をおよぐように渡り、やっと四両目で検札中の車掌を見付けた。一部始終を説明し、次の停車駅で、電話で居残った奥さんの身柄保護等をコンコルジア駅長を通して同市の在留日本人に依頼して貰うように頼み込んだ。

車掌はウルサイことになったというような顔付だったが、気持良く承諾して呉れた。すぐに御主人や家族にその旨を伝え、安心するよう説得して、私は食堂車に戻って早水監督にも報告し、急いで食事を済ませて、次の駅を待ちあぐんだ。

汽車は停ったが、プラットホームもない寒村の小駅で、車掌は片足を昇降口にかけてながら駅長らしいのと二言三言話したかと思うと、笛が鳴って、汽車は動き出した。間もなく車掌は

私達に次の様なメッセージを伝えた。「駅長が氣を利かして、日本婦人を駅前のタクシーに乗せて、汽車を追わせたから、その旨我々に伝えてくれ」という事である。私は早速次の停車駅名と距離を聞いた。次の駅は五十キロ先のフェデラシオン駅その次は三十キロ先のチャハリ駅だと言ひ残して、忙しかさささと次の車へ行ってしまった。皆なんと一緒に「追付けるかどうか」に就いて話し合つたが、余計に心配になつてきた。

車輪の軋る音も急にスピードが速くなつてきた様に感じられて仕方がない。同室の重國人の乗客も、どうやらこの「屈残り珍事」に氣付いたらしい。我々の不安そうな顔付を察してか、安心するように色々話し掛けてくれる。先の駅から乗り込んだこの辺の地理に明るい乗客の一人が低い声で私にこういつた。

「昨日の大雨で道が悪くなつてゐるから、自動車はスピードが出せませんよ。そして後二つ目のチャハリ駅を過ぎると、線路と道路がうんと離れてしまうから、当低追付けません」と。こんな悲觀的情報は皆んなに伝達せず、私は追付けなかつた場合の措置を既に考へていた。私はデッキに立つてフェデラシオン駅に近づくのをいらいらして待つていた。駅が見えたので、駅のフォームに日本婦人らしい姿を見出だそうと、努力したが駄目だった。私は車掌と駅長室に走り込んで、簡単に事情を話してコンコルジア駅長宛次のように通達して下さいと懇願した。

『日本婦人は戻ったか否や。次駅へ御返事乞う。帰って来たら直ぐに貴地在留日本人に連絡され、同婦人の保護方を依頼され、明日の汽車でポサーダス向け出発するよう、御手配をお願いする』と。

駅長は「コモ・ノン・ムチョ・グスト」(宜敷しい。喜んで引受けました)と、ニコリしながら私に握手をもって応えてくれたので、感謝しながら車に戻って一同に報告した。

多少落ち着いた気持になったので、奥さんの居残った直接原因を探察し始めた。

前述のように、コンコルセジャ駅に着いて直ぐ私が家長達に注意をした時、昼寝をしていた中に例の奥さんもいた訳だ。その婦人が御主人や同行者の気のつかぬ間に、突然下車してしまつた。しかも駅構内のWCに入られたらしというのである。

列車の各車にはWCの設備があるのに、たとえ自分の車のものが「使用中」であっても、前後の車にいても良い訳だ。あるいは車内の設備が使用に堪えなかったのか、あるいはそんな余裕もなく飛び出されたのかも知れない。それにしても垂着数日で、よく用をたせる場所を見つけただけの感覚の鋭さに驚いた。

私も汽車旅行の時、駅ホームで小用する時さえ、一応停車時間を計算に入れていても仲々落着いて用を足した気分になれない。汽車は最後の望みを掛けていたチャハリ駅に着いたが、遂に奥さんは我々に追付けなかった。私は停車中、今にも来るか来るかと首を長くし目を見張

うて駅前の道路を見ていたが、三、四分で列車は動き出したので、駅長室まで行く暇もなく、がっかりして車内に入った。皆んな唯黙って顔を見合すだけで、お互いに慰め合う言葉もない。暫くして車掌が紙片を片手にして我々の処に来て、コンコルジア駅長からの伝言だと紙切れを読み出した。日本婦人は戻って来たので、日本人の家に引取って、世話をしている、明日発たせる。」とあった。皆んなの顔も急に明るくなって、お互いに「よかったよかった」と心から安心した様子であった。

バタバタしている間に、汽車はエントレリオス州を通り抜けて、コリエンテス州内を走っていた。いつの間にか太陽も西に傾いている。広野の野生の草木も亜熱帯的な刺の多い草や灌木が立つ。牛等も暑さのせいかゲツソリ瘦せている。

真赤な夕陽が丘陵の彼方に沈もうとする頃、汽車はパッソ・デ・リブレ市に着いていた。この町は人口三、四万人といわれる。ウルグアイ河を境として、対岸のブラジル領のウルグアイジャンナ市と対峙しており、両国間を結ぶ唯一の大国際橋が架せられているコリエンテス州でも重要な都市の一つである。

停車すると同時に三十歳位の一日本人が車内に我々を訪れてこられた。この人は当市に在住する唯一の日本人で、洗染業を営んでいる世礼さんという沖繩出身の人であった。この予期しなかった邦人の来訪に、私達は一寸驚いたが、来訪者は挨拶もそこそこに「実は先程コンコル

ジアの在留同胞から電話があつて皆さんと同行で居残られた婦人は、井上さんと前武田さんがお世話しており、明日の汽車にお乗せするから、皆さん安心するように伝えて下さい」とのことでした」と言い、「忙しいですから失礼します、御気嫌よう」と言い残して降車された。皆さんな窓から頭を出して「有難う有難う」と礼をいっていた。

世礼さんは駅の建物の横に立てかけてあった自転車に乗って、振り返りもせず夕闇を町の方へ消えて行った。私は彼の後姿をジッと感謝の気持で見送り、コンコルジアの同胞の心温さと臨機応変の措置、それに多忙な仕事を放り出して駅迄駆けつけてこられた世礼さんの好意に感激した。在留同胞がイザという場合に、相互に固い鎖となつて助け合う心構えの潜在することを痛感したのである。全く予期しなかつたこの吉報に、皆さんは堅くなつたサンドウィッチやパンも、晴々した気持で美味しそうに食べていた。

鉄路の傍の水田が、夕闇の間から処々に見られる。この辺はアルゼンチンの米の重要な生産地帯である。汽車はコリエンテス州を北上して、最終駅に向かつて走り続けている。残る七時間の汽車旅は寝るだけとなった。私は皆さんに午前三時頃ボサードスに着くらしいからその積りでいてほしいと注意して、監督と共に寢室に帰つて始めてヤレヤレと思つた。過ぎ去つた七八時間中の出来事を静かに考へてみた。若し今日の出来事が、在留日本人も住んでいない町や田舎の小駅であつたり、又は大人でなく幼い子供であつたら大変なことになつたらう。

急に冷気を感じて目が覚めた。時計は二時半を廻っている。さつそく身仕度をし、手荷物を整備して皆んなの車へ歩を運んだ。乗客もグッスリ寝込んでいる。こんな車中の風景は洋の東西を問わない赤裸々な姿であると思つた。

アルゼンチンの汽車は始発駅で発車が遅れることは珍らしいが、又定時に着くことも珍しい。私達の汽車は一時間も遅れていたのに、いつの間にか遅れを取り戻して、殆ど定時の午前
三時十五分に終着駅ポサードスに音もなく停つた。

先を急ぐ乗客が二、三十人、列車から離れていった後、プラットフォームには人影もなく、薄暗い照明の下を野良犬が二、三匹ウロウロしていた。車中に残つた旅客は夜明け迄寝込んでいるらしく、森閑としている。停車して急に静かになつていか、皆んな目を覚し始めた。汽車が定時に着いたので、移住地からの出迎えもまだ来ていない。とにかく下車準備を始めた。車外はずいぶん冷えるので、子供達に風邪をひかないように厚着をさせた。暫くして、移住地の亜拓の管理人の栄さんが来られ、他の出迎えの人々とトラックを呼びに町へ帰つて行かれた。小一時間ほどして、移住振興会社の谷口さんと斉藤さん、それに亜拓補助員の山本君が栄さんと一緒にトラックで慌ててやってくる。

家族総員が協力して、全部の荷物を二台のトラックに積みこみそれに便乗して市内のサンマルチン・ホテルに着いたのは四時半頃、ミシオーネスの空も微かに明るくなりかけていた。一同

は取りあえずこのホテルに入って休息することにした。蚊張がついた寝台が六つ並んだ大きな部屋へ一同入って、思い思いに腰をかけた。皆んな睡たそうであるが、ブンブン大きな蚊が襲来するのでオチオチ出来ないでいる。

移住振興の谷口さんは、移住地に着いてからのことについて、親切に説明したり話をしておられる。先程まで鼻を突いた蚊取線香の香も、次第に薄らいでいくと、やがて外も明るくなってきた。すがすがしい夏の朝である。ホテルの向こうの泥道の赤い色と樹木の濃緑色の対照が、目を覚ますばかりで、ミシオーネスらしい雰囲気を醸し出している。ポサーダス市は、ミシオーネス州の首都で、人口五、六万人、州政府の所在地であるだけに、市の中心部は立派に舗装されているし、仲々感じの良い気の利いた町である。パラナ河をへだてて対岸はパラグアイ国エンカルナシオン町と相對している。

アルゼンチン式に、朝食をコーヒと牛乳、パンとバターで済ませて家長達は栄さんの案内で市内へ食糧品や必需品の買出しに出かけ、十一時頃帰って来た。二日振りでタジャリネ(洋式ウドン)スープ、肉の料理等で食事らしい食事に腹ごしらえした移住者一行は、亜拓と移住振興のトラック二台に分乗して、愈々最後の目的地ガルアペー移住地まで、百七十五キロ国道第十二号線へ走り出した。正午を少し過ぎていた。国道に沿って、土の色、樹木と雑草の緑が隣國ブラジルのサンパウロ州やパラナ州のそれと全く類似している。地勢は全く波状であるか

ら、圍道も上ったり下ったり、大きな波のウネリを乗り越えていく感じである。太陽の直射はなかなか激しいが、吹きつける風は快適である。時々子供達の用事で車を止めて休息した。頭から足の先まで赤い砂塵で真赤になって目的地ガルアペー移住地第六号区の収容所前に着いたのは、夕闇迫る頃であった。プエノス・アイレスを発って約四十九時間の汽車とトラックの旅も、一人の病人も怪我人もなく、手荷物の紛失や盗難にも会わずに済んだ。只残念だったのは、途中で居残り珍事があったことだけだった。これも社用でボサーダスに残られた谷口さんが、例の奥さんを出迎えられ翌朝九時半頃一緒に元気で移住地の我々にヤット追付かれた。私は奥さんに「御無事で結構でした、さぞお疲れでしたでしょう。」と挨拶をした。奥さんはニコニコしながら多少羞しそうに「どうも有難う御座いました。」と一言いい残して、取巻いた家族や同行者の中心となって、収容所の方へ登っていかれた。今でもその当時の事を想い出すとおかしさと股立たしさを覚えるのである。

アルゼンチンでの移住者の旅行に、こんな珍事は今迄に聞いた事がない。又将来も絶対に発生する事がないよう『居残り珍事』にハッキリと終止符を打ちたいものだ。同時に移住者各位の平和と幸福を心から祈っているものである。

(筆者 池田信雄 在亜三十二年 亜拓会計 センタリ辻商会副支配人)

戦後來亜した実習生の手記

一九五四年九月二十一日、春のブエノス港は小雨に煙っていた。私の呼称団体であるアンデイノ・クルブの役員諸兄と、その引受人達の出迎えが埠頭を埋めつくしていた。その日まで文通こそあったが互に初対面の人達ばかり、上陸の第一歩から我々の新しい人生が展開して行くのである。太陽の地平線より出て地平線に没する雄大な原野が我々の心も雄大にしてくれる。祖国を捨てた日の夢が日一日と大きく育って行く。太陽を迎え太陽を送る生活、激しい毎日の労働もパトロンの心づくしの食事で、その日の空腹も疲れも拭い去ってくれる。

日本語の生活、日本食の毎日、海外らしさを一向に感じない。日本での悲壮なまでの決意も、何んだか笑い事のようにさえ思える。「アルゼンチンへ来て遠慮する奴は馬鹿だ」と最初聞いたが、その言葉は本当だなとしみじみと感じる。

毎日の生活もパトロンの家族と同様な扱いを受け、アルゼンチンでの常識のあれこれを教えていただく。スペイン語の勉強のために、作業時間さえも無視して実子の様に便宜を計って下さる。共通の夢と過去を持つ先輩と後輩。ある時は激しくのしられ、むち打たれ、頼る人もない時、不安のどん底に陥る日もある。又どの仕事にしても自信がなく思うように行かない時、やり切れないいらだたしきを感じる。

病を得て病床にある時、しみじみと人情を知る。夏の夕べ、セルベッサでのどを潤しながら聞く先輩の苦心談は、我々後輩の歩むべき道を教え、そして諸兄の親にも勝る親切と後輩に対する責任感なるものを感じ、強く励まされ自分の進むべき道の方向付けに資する所が少くない。

こうした数多い先輩の常に変わらぬ善導のお陰で、我々若輩五年ですでに一人前のパトロンに成長している。ある者は妻を娶り、ある者は地主となり、皆それぞれに自分の事業に精出し、着々とその実をあげつつある。

日本にいた時の水飲百姓の二、三男坊も、先の見込の無い一介のサラリーマンだった者も、皆それぞれに土に親しみ、花と共に生活の明け暮れを送っている。

カラカラに乾いて口を傷付けるパンを水で流し込んで、空腹をしのぎ、イモ又イモの毎日だった独立当初のことなども、今では思い出話になってしまった。

今日、これまでに成長できたのは、各パトロンの限りなき援助と、先輩の親切、そしてアルゼンチンの広大な沃野が有ったればこそといえる。

現在の日本には、海外に夢を持つ青壮年が溢れるばかりにいる。彼等が本当に土に親しみ、植物を愛する心を持ち夢と野望を実現すべく努力する決意があるならば、一日も早く来歴することだ。夢と野望が実現する国、努力が汗がそのまま成果となって現れる恵まれた国である。

何よりの証拠に戦後派の我々でも結構希望がかなえられて行くのだから。

最後に亜国拓植協同組合、アンディノ・クルブの発展と先輩諸兄の繁栄を祈って筆を置く。

(筆者 早藤八三郎 在亜五年 実習生 花卉園経営)

メンドーサ州に於ける

果樹類の栽培状況

メンドーサ州の農業の概況

特色

第一にあげられるメンドーサ州の農業の特色は灌漑農業にある。この点にこれから述べる総ての農法と日本における農法との根本的な相異がみられる。

当亜国ではメンドーサ州のみならず、隣り合っている諸州、リオ・ネグロ、サンファン、サンルイスも同様灌漑農業が行なわれているのである。

灌漑というものが当地方の農業の生命であり、さらに、その灌漑組織の行き届いていること、それ故に全州縁に覆われて意外に進んだ農業が営まれていることは驚くほどである。

灌漑水利局は州政府内においても重要なポストにあり、その配下に管理も完全ではないにしてもかなり行届いている。メンドーサ州の面積一五〇、八一九平方呎のうち、灌漑施設が行届いている面積は、五十万ヘクタールであり、その規模は割に大きく、日本で大きく取り上げている相模台地の三千ヘクタールとは規模の上で比較にならない。

気 候

メンドーサ州は典型的な乾燥地帯である。年降雨量二〇〇—二五〇ミリ程度、ブエノス・アイレスの降雨量の五分の一、いかに大陸性気候の地域差の激しいかを知らされるのである。従つて降らない時には二ヶ月も雨らしい雨が降らないことも度々ある。春から夏に移る十一月になると雷雨の時期に入る。この雷雨が多分に降雹を伴なうので危険である。大体三月頃まで時々雷雨がある。植付の時期に降雹に会い、そして収穫を目の前にして悲惨な目に会うこともある。この雹害対策として打ち上げ花火のようなものを打ち上げる。標高三千米も上昇、直径二百五十米の範圍に效力を及ぼすといわれる。

気温の最高は一月三七—三八°C、最高六月七一八°C、零下にさがる時もある。初霜は四月中旬に降ることもある。晩霜はほぼ十月下旬、今年は十一月下旬に降霜があった。

とに角、日本の海洋性気候とは比較にならぬ程に気温の激変がある。夏、日中焼けつくように暑くても、朝夕はめっきり冷える。冬は朝夕寒くても日中シャツ一枚で仕事が出来来る。夏の暑い時期にこの習慣として昼寝をよくする。日照時間も、夏一番長い時で、日の出六時五分、日没八時五十分位、冬一番短い時で日の出八時四十五分、日没六時十分位で、冬は大して仕事が出来ない。乾燥地帯の特徴として、年中を通じて、空気が乾燥して、とても生活し易いといふことが上げられよう。

土 壤

一般的にいつて、沖積層土壤で砂土壤かと思われる。そして多少硝石を含む。

アルカリ性に富んだ土壤であり、相当肥沃である。灌漑水にも多少の肥料分が含まれている。ここ数年前まで、肥料を考慮することなしに栽培が行なわれてもすべての作物が意外によく成長している。又この地帯に石が出ない。これは明かに昔は大きな河があったものと考えられる。従って土地は非常に良い。

ただ粘土質の所には、硝石の非常に多い所が部分的にある。地面の乾いた状態の時は一面に白くなっている。土地そのものは良質であっても、作物を植え付ける際、非常に吸収力があるため定着が容易でない。以前はそうした部分は手をつけなかったが、排水路を作る事によってその難題を解決した。灌水によって流し捨てるといふわけである。こうして排水された水は何の役にも立たない。飲むと塩辛くて、むしろ苦味を感じる。

水について述べると、日本で何処でも得られる軟水は、当地では雨水を貯えて使うか、鉱水として売っている。従ってこの地方で雨水は貴重なものである。用水としては一般家庭で灌漑水を水槽に貯えて利用しているが、それとても硬水で塩味がある。町ではこの水を軟化して水道へ送っているが、石鹼は溶けず洗濯には必らずソーダを使う。従って衣類の寿命も短いようである。日本から来て一番最初に悩むのも恐らく日常使う水であろう。

果樹の栽培概況

メンドーサ州で大きな地位を占める生産物たる果樹は、大部分が加工用となる。少数生果用として輸送される。その為に加工用に適した種類が選ばれる。生産の主体が資本位でなく、母本位である。従って、肥培管理の方法も日本のそれに比べると、とても手数が少なくて済む。しかし最近の傾向として、これからは、たとえ加工用であっても質というものが重視されてくる。これには農業技術や品種の選択が必要となってくる。

生産物の取引については、一応霜害の危険が去って十二月頃になると、加工業者は各国を走り廻り取引を始める。これは収穫前に立木のままの売買が行われるのである。大体的見積から割出した数に対して価格をつけ、両者の意見の一致を見て取引が成立する。こうして取引が行われると、その後の管理を除き収穫はすべて業者持ちである。そして病気が発生すれば業者側で手を打たねばならない。栽培者側では手数がはぶける。特に収穫には相当の人数を要するため、各国で収穫する人夫を集めるといふ事も困難さをはぶくためにも好都合な事であろう。しかし収穫まで待って、その時の価格で売るものもある。どちらが得になるかは一種の賭のようなものである。

ブドウ

分類の仕方面白い。このブドウを果樹といわない。ブドウ及び果樹類は……というように、

ブドウは独立している。メンドーサ州の特産物といわれるものであり、その殆んどがブドウ酒に變るといっても生産高の百分ではない。しかし並国におけるブドウ酒はその殆んどが国内消費であり、生産にも限度があるようであるが、その消費量は非常に大きい。食事の際、一緒に飲みつつ食事を取る。食生活も肉が主体であり、ブドウ酒を飲む事によってその消化を助けるともいう。仕立の方法はその大部分が二段垣仕立である。棚仕立ては非常に少ない。その長所短所をあげると、

垣仕立ては経費が少ない、管理が容易、という長所に対し、短所として霜害の危険率が高いのである。棚仕立は霜害の危険率が低い、管理次第では収量が多い、という長所に対し、管理には幾分不便が多い、経費も多くかかるという短所がある。いずれにせよ量が問題になるので、大いに研究の必要があろう。

品種も日本で用いられているアメリカ系のものでなく、ヨーロッパ系のビニフェラ系である。数種あるが糖分は高い。純ブドウ酒用のものが多く植えられ、良質のものが生産される。

1. 植え付け

苗木の準備として一応苗圃を作る。冬剪定の際に切ったのを四十乃至五十センチに切り、排水のよい所に埋めておき、九月初旬―下旬にかけて挿木するのである。接木はあまりやらない。畦巾一米三十乃至一米五十、株間十五センチ程度、翌年十月中旬にそれを移植するのであ

る。

垣仕立の距離は二米半×一米半が普通の密度である。

柵仕立の距離は垣仕立より疎植で、二米三十×二米半で棒の根元に二本植えるのが普通のようである。植付後四、五年で相当収量が上る。

2. 管理

植え付け後、灌水と除草のため中耕を行なう。冬の間は、株に土を寄せてあるため、春、除草を兼ねて中耕株の側を開く。収穫後株の側に土を寄せる。冬は剪定である。これは大体七月に入ってから行ない、九月発芽前に誘引も終わらせる。

3. 病虫害

メンドーサ州では、病虫害は非常に少ないが、ブドウで一番心配するのはプロノスベラというもので、おそらく黒痘病又は晚腐病に当るものと思われる。虫害はあまりない。

九月下旬 催芽期に石灰硫黄合剤の撤布、しかしこれはあまりやらない。

十月下旬 開花前、ボルドー液撤布

十一月下旬 果実小豆大 水和硫黄剤、ボルドー液混合

一月初旬 果実肥大期 水和硫黄剤、ボルドー液混合

の四回―五回程度の薬剤撤布を行なう。

4. 収 穫

最初ブドウ酒用のものが三月下旬収穫される。それから生食用品種の糖分度の上るのを待つてブドウ酒用として収穫する。これはブドウ酒を作る上に必要なのは含有糖分であるので収穫前に計器によって糖分度を調べる。そして、十二度に満たないうちは収穫を待つ。収穫されたブドウは醸造場に運ばれていく。

桃

桃は大体生果、加工と半々位であり、加工の殆んどが罐詰用である。日本の水蜜桃の如き品種はなく、黄肉種が多い。主に早生の生果、晩生の罐詰乾果として利用し、その他の中生種は生果、加工いづれも高価なものである。

1 植え付けと管理

苗圃の準備として収穫後、加工工場から出る種子を埋めておき、翌春播き付ける。畦巾一米株は十五センチ程度、三月芽接を行う。この際台木となる種類は可能ならば、サンルイス州の野生種を用いたい。芽接は品種の別を厳密にし東に面した所に芽接する。三年目の春、八月中旬から定植を行う。栽植距離は六米×五米が普通である。

定植と同時に土の表面より六十乃至七十センチの所で剪定をする。仕立方は特に誘引などしないため良枝を三、四本残す。剪定も一応型らしい自然歪状程度にとどめる。三―四年後ポツポ

ツ上って来て、六―七年後には相当の収穫があるが、その後は増す一方である。

その他の管理としてブドウと同様灌水、中耕、除草をやる。日本の如く摘果、袋掛けのよう
なことは一さいやらない。剪定は六月に入ってから行なう。

2. 病虫害

桃の病気は縮葉病、穿孔性落葉病と炭疽病位である。又虫害ではモモヒメシンクイ虫、モモ
ノメイガがある。

八月下旬 催芽期、石灰硫黄合剤

十月中旬 落花後、ボルドウ液又はフィゴン (アメリカ産の総合薬剤)

十一月下旬 果実摘指大、フィゴン (Phygon, X I)

一月初旬 果実肥大期、フィゴンとホリドール混合

3. 収 穫

早生の二、三品種は十二月中旬に収穫、生果としていわゆる『初物』であるので案外需要が
多い。晩生は三月下旬、その他中間種は一月下旬より二月一杯に行われる。

(筆者 千代宣義 在苗二ヶ年半 外務省農業実習生)

亜国生活満一年を終えて

今月の十八日で、僕もようやく亜国生活満一年を終えたことになる。昨年十月四日横浜から家族や親類や友人達に見送られ、あふれるばかりの希望と夢をいだいて、ここアルゼンチンに来て全くこの一年の早かったことに今更ながらおどろく。そして今日その一年をふりかえってみて言えることは、ただ無我夢中でその日その日の仕事に励んできたと言う一語にすぎない。将来のことも過去のこと何一つ考えず、ただ環境になれる為と仕事をおぼえる為とに全力をつくしてきた。

ここへ着いた時はちょうど夏の真盛りで、一番仕事の忙しい時期だった。長い船旅で弱っていた身体にアルゼンチンの酷暑と初めての仕事は確かに相当の苦痛だった。最初の一月は、本当にこれで身体がつづくのだろうかと思った。少なくとも日本よりはのんびりとやっているだろうと思って来たのだがとんでもない。一定の決った時間内にはきっちり働き、日本の百姓のようにいたらしていない。生来胃腸が余り丈夫でない僕は、十日足らずしてお腹をこわしてしまった。それも急に油っこい食事をするようになったのが原因であろう。下痢をして二、三日は殆んど何も食べずに仕事を休む始末だった。日本で言ういわゆる猫の手もかりたいの

に休んでしまい。全く主人にはすまなく思ったが、家族の人達や皆がやさしく親切に介抱してくれ、わざわざ病院までつれて行ってくれた程だった。それから僕は毎日の食事にも気をつけ、病気をしないように注意した。特に生水をのむのはいけないことを主人に言われ、いくら温室の中の仕事で、のどがかわいても、うがいをしただけをしがまんするようにした。肉のすきな僕は食事になれるに従って夕食に出る大きなドフテキがたのしみで、思う存分肉を食べられるだけでも、アルゼンチンへ来てよかったなと思ったりした。

僕の働いている農園は、約六町歩の土地に温室（五〇米）十三棟を建てて、カーネーションだけを作っている。この近辺では割合に大きな方だ。主人もなかなかのがんばりやで、渡重二十年にして一応目的を達し、一昨年に家族一同（五人）で日本へ遊びに行ってきたものである。僕もこのような主人の下で働けることを有難く思っている。

さて、一週間働らき続けると、日曜日には、ゆっくりと自分の自由な時間で、気ままにやめるのが楽しみになってきた。

三カ月もたつ頃には、次の日曜日の計画をたてて、少しづつアルゼンチンの社会を眺め始めることができた。二世の人達と一緒になって野球をするのも、大いに日曜日のたのしみの一つとなり、仕事仕事に追いまわされていた身体に、何かゆとりが湧いて来たように思えた。日本で少し野球をしたことがあるから、自慢ではないが一躍正選手になってチームをリードする格好

になってしまった。野球に熱中していると、どんな苦痛も忘れる事ができ、又翌日の月曜日からの仕事に励みが出た。そして、二世の人達と一緒にスポーツで汗を流しあうことによつて、言葉もおぼえ、早くアルゼンチンの生活にとけこむことができるだろうと思ひ、積極的に二世の人達の中へ入るようになっていった。

主人をはじめ家族の人達が本当にやさしくしてくれ、僕等を使うと言ふより働らいてもらうという態度で話をし、毎日の食事には、うるさい程の神経を使ってくれるので、自然こちらも感謝の念を抱くようになる。仕事を沢山するというよりも、与えられた仕事に対し、責任をもち、誠意をつくしてやるように努めている。

外人達も使っているが、彼等と同等にはとてもやっては行けないことは明らかだ。カーネーション作りは一年を相手とするため一つ一つの仕事が終わつて影舞していくので決つていいかげんには出来ない。僕に仕事を与えてくれることに對し、僕は全てに感謝して働らくようになり、やがてつらさというものを忘れて行つた。一晩ぐっすりと眠ると、前日の疲れはずっきり消えて、気持ちよい一日の出発が出来た。忙しかった夏も終り、アルゼンチンでの初めての冬を迎えた頃には、家族の人達ともすっかり親しくなり、家族同様の生活を送れるよよになった。何一つ不満なことはなく、仕事が終わつてからスペイン語の夜学にも通わしてもらつた。近辺の友達も出来、お互に自分達の毎日の様子や、將來のことも話し合つた。

ピクニック、ピンポン大会、演芸会等各種の年中行事にもよろこんで参加し、先輩の方達とも交って、これからの花作りについて何かと指導をうる事が出来た。

満一年を迎えた今日この頃では、自分の将来についても考えられる程毎日の生活に余裕をもち、一層楽しく仕事が出来るようになってきたのは、本当にうれしい。日本でいくら一生懸命に働いていても、現在の様な人口過剰で就職難の状態では、独立を志すことはなかなか困難だ。農園によって多少の違いはあるだろうが、ここアルゼンチンでは四、五年真面目に働かさえすれば、将来の独立は容易である。

現在僕はそういった明るい近い近き将来をめざして、悔のない生活を送っている。主人に使ってもらっている間が、僕の独立後を左右するのだと思うと、何一つおろそかには手を下せない。甘い夢はすべて親元を離れて来たのだから、余程の苦勞はしなくてはと覚悟していたが、今のところそれほどでもないのに多少気落している。

カーネーションについて無知識だった僕が、一年間世話してきてみて、カーネーション作りが面白くなってきたので、秘かにうれしく思っている。主人とがっちり組んで、日本人の経営として、はずかしくないよりよい農園を築いて行くと共に、立派なアルゼンチンの花造りになつてやろうと決心している。そうする事が祖国日本に対しての奉仕にもなると信じている。

(筆者 小川幸男 外務省農業実習生 在亜一年)

メンドーサ市郊外

ウベルティニ農場満一年

戦後、初のテストケースとして外人経営者に呼び寄せられて来亜してから一カ年、どこまでも澄みきった空の下、名物の並木道路は言うまでもなく、ブラサに、そして家々の庭に年中絶えることのない花の美しさ、また、このメンドーサにいたることが夢のような気がしてならない。

自分は、日本にいる時、南米へ行ったら地平線の彼方から登る太陽の下に、開拓小屋を組立て、新しい村、なごやかな団樂を築いてゆこうと、美しいイメージを描いていた。そして実際にこのアルゼンチンに上陸してからは、大パンパとそして一面の砂漠を、パトロンの外人社長自ら運轉するハイヤーで管千百軒をひた走りに走り続けて、メンドーサにやって来たのだ。ここは雨は少ないが(年間二百ミリ位)緑の平原が何処までも続いている。そして垣根仕立のブドウ畑にオリブ樹が混作されている間を縫って、田舎道のどこまでもポブラ、柳、プラタナスの並木が続いている。目的の地はメンドーサ市より東方九軒の地点だが、着いて驚いた。私の仕事だと思っただけで来た庭園は、もうすっかり出来ていて、中には立派な水泳プールまであった。オリブの搾油工場は実にオートマチックで、罐詰設備まで整っている、庭園の中に、別

荘に連なつて私達の住いがあった。庭園の外には、十米間隔に整然と植えられたオリーブ園が開けている。そのほか、ブドウをはじめ柑橘類に至るまで多種の果樹があつて、これ等の果実の甘いこと、日本では到底考え及ばぬほどである。恐らく日照の相違によるものであろう。ところが仕事ともなると、そう楽天地とばかりいってはいられない。初めに庭園師という招きで来たのだが、間もなく農場監督が辞めたので、私はその後任を承わり、その上、自分で和洋一通りの野菜の試作を始めた。又ポチポチ切花の栽培もやってみたいと思つたが、それには土壌が色といい、質といい、灰のような微砂であるから、まず土から造らねばならない。私達は土は微生物の棲む生きものであると農学で教えられたが、ここの土は全く駄物ではない。私はパトロンの為にも収支償う立体的実験農場の建設をもくろみ、作物の栽培以外に牧畜にも手を染めた。間作にアルファルファや麦類、南瓜、トウモロコシ、サツマ諸などを作付けして、これを飼料にあて、馬、豚、鶏、兎、山羊、ハト、アヒルなどを飼つた。来亜早々生まれた赤ん坊まで加えると、相当の大世帯になつてきた。これ等の仕事は、一切、私の発案に始まり計画実行されたものである。日本人として外人に呼寄せられたテストケースとして、私のせめてもの努力なのである。以前の農場主任が単に労働者の監督でしかなかったことから、私もそれと同じ役割を課せられることもあり、そういう時若干の不服も無いではなかつたが、今はとにかく一意専心倒れて後止まんの意氣に燃えている。

今までの苦難といえは、やはり言葉と習慣の違いであろう。邦人間の個人呼称はいうまでもなく、海外実習生などの独身青年移住、家族ぐるみのコロニアへの入植など、いずれの形式で移住しても、最初に突当る壁は言葉だと思ふのである。それは単なる言葉だけにとどまらず、習慣はもとより、氣候風土、社会事情、農業事情等の相違に波及し、それ等を一一つ身につけ、それに慣れてゆくことが、移住した者の最大の課題であることはいうまでもない。そして、私の場合は、外人パトロンと、どのようにしてうまくやうて行くか、ということに、テストケースとしての特異な課題があると思ふ。私のきくところによるとコロニアは、この国生えぬきの同胞農学士を先頭として、着実に移住地を建設し、快適な氣候のもと豊沃な土地で、伸び伸びと働き、生活している由である。アルゼンチンには、このような力と心のこもった邦人の少くないことを祖國の心ある人に告げたい。

そして邦人による生産事業がこの國の西に東に南に北へと一顧発展していくことを念じてやまない。

(筆者 増田四郎 在亜一年 ウベルティニ農場管理)

編集のあとに

▽アルゼンチンには、これまで、日本人の集団的移住者の入国はできないものと思っていたのだが、亜拓幹部の努力と在亜日本大使館の後押しで、至難とされていた門が開かれ、一九五七年一月十一日付をもって、遂に日本人四百家族の入国許可が下付されるに至ったのである。

▽四百家族入国の許可がとれたものの、移住者第一陣が入植したのは一九五九年四月十八日で、三年有余を経過した今日、僅かに二十六家族百三十九人が入植したに過ぎない現状である。

▽これにはいろいろな理由があったにしても、日本の反対側にあるアルゼンチブの実情が、ハッキリと日本に知られていないのが、最も大きい原因であったと思われる。

▽そこで、日本人移住地としての第一号、ミシオーネス州についての特集号を出して、移住地の実際をお目にかけることとした。

▽ミシオーネスの概要にはじまり、邦人の活動状況、生産業の大要などから、ガルアペー移住地の現状、営農計画に及びブエノス・アイレス入港から移住地までの案内まで、微力な我々が精一杯に書いたもので、熟読していただきたい。

▽第一陣の古庄氏は、アルゼンチン大陸は広くて肥沃であり、一人でも多くおいでなさいといっている。兼江健三氏も、アルゼンチンに肥沃な広大な土地が待っている、ためらわずに大いに進出されたいとすすめている。

▽第二陣の福田半次氏は、この植民地は気候もよく、永年作だから、将来の事を思えば、この植民地にかぎると力説している。第四陣の伊藤昌吉氏も、ガルアペー移住地をためらわずにすいせんするというし、原田左平氏は、じっと辛抱することによって必ず大きな希望が持てる」と説いている。

第五陣の小池悦夫氏は、この移住地は極めて交通が便であるとほめているし、角田弘三氏は真面目に働けば必ず安定した生活が出来る」と喜んでいる。

▽最後に入植した植松岩雄氏は、移住を希望する人々は、あまりに小さい事にこだわらず、ドシドシ事を進めるべきだとし、徳田実氏は、南米に移住するなら、住みよいアルゼンチンをお奨めするといっている。

▽これ等移住者の意見をまとめてみると「来てよかった」「みなさんも早くお出でなさい」につきると思う。

▽筆者も、昨年移住地を訪ねたのであるが、いづれも、一家揃って、非常に明かるとい希望に満ちた生活を営んでいるのを目のあたりに見て、心強く感じた次第である。

▽第一号ガルアペー移住地、第二号は世界的ブドウの産地メンドーサ州アンデス植民地、第三号、第四号と門戸は開けて行く。移住せんと欲する日本人々々を、アルゼンチンは両手をひろげて待っている。

▽編集を終わって筆を折るに臨んで、本誌のために序文を寄せられた外務省移住局長高木広一氏と、在アルゼンチン領事林屋永吉氏はじめ寄稿者諸氏にお礼を申し上げると共に、組合員の多幸を祈ってやまない。

アルゼンチン国ガルアペー地区

自営開拓移住者募集要領

一、移住者の資格条件

一、農業者であること。

二、労働意欲が旺盛であること。

三、世帯は原則として一夫婦と実子のみをもって構成され、なるべく稼働力豊富な世帯が望ましい。但し、夫婦のみでも農業経験及び資金の豊富なものについては考慮される。

四、世帯員はすべて身体強健かつ次の病氣及び肉体的欠陥のないものであること。

- (イ)伝染病
- (ロ)トラコーム
- (ハ)ライ病
- (ニ)結核性疾患
- (ホ)象皮病
- (ヘ)ガン
- (ト)感染期にある性病
- (チ)精神病
- (リ)アルコール中毒
- (ヌ)麻薬嗜好症
- (ル)不具陥失
- (オ)慢性胃腸障害
- (ワ)腺病体質
- (カ)遺伝性疾患
- (キ)盲聾啞
- (ク)労働に支障ありと認められる身体機能障害

註、トラコームについては特に検査が厳重であり、完全に治癒しても癍痕があるものは絶対に不可である。

- 五、思想堅実で極右極左の思想信奉者でないこと。
- 六、犯罪、その他反社会的行為をしたことのないこと。
- 七、アルゼンチン國に永住の目的で渡航すること。
- 八、生活營農資金、土地代頭金及び荷物運賃として
合計三十三万五千円以上を用意出来る世帯であること。

一一、応募方法並びに選考

一、手続書類

イ、移住申込書

規定様式のもの一世帯につき 一通

ロ、居住証明書

規定様式（各人写真添付）一世帯につき 二通、市町村長発給

ハ、戸籍謄本及び戸籍抄本

戸籍謄本一通、及び世帯構成員各人につき戸籍抄本一通

ニ、無犯罪誓約書

十五才以上の各人につき 一通、市町通村長発給

ホ、善行証明書

規定様式のもの各人につき 二通、市町村長発給

ヘ、農業従事証明書

規定様式（十才以上の世帯員連記）一世帯につき 一通、市町村長発給

規定様式（十才以上の世帯員連記）一通、地方海外協会会長発給

ト、健康証明書

規定様式、世帯構成員各人につき二通、都道府県庁所在の日本赤十字病院院長又は内科

部長証明

チ、無トラコーマ証明書

規定様式、世帯構成員各人につき二通、同右眼科部長又はこれに準ずる医師の証明

(註)

イ、規定様式中アルゼンチン移住者に特定のものがあるから注意のこと。

ロ、ト、チについては地方の日赤病院の診断書でよいが、入国許可後査証のためのト、チの

書類は神戸あるいは東京のアルゼンチン在日公館指定医の診断を受けることになる。この場合前者と後者の診断が従来の経験上往々にして異なることがあるので、近県で事情が許すものは最初から指定医の診断を受けることが望ましい。

二、地方海外協会における選考

イ、地方海外協会は応募世帯全員について面接するものとし身体条件、農業経験、人物等について充分吟味して、適格者を選定することとし、特にトラコーマについては治療後の癍痕保持者もアルゼンチン国への入国を認められないから、嚴重に診断を実施すること。

ロ、地方海外協会は前記推せん期日（毎月末）迄に前記書類に、選考調書及び選考概況書を添えて、適格と思われるものを海協連に推せんする。

三、仮合格、合格者の決定

一、仮合格について

イ、海協連は、地方海外協会より推せんされたものについて、適時選考会議を開き適格世帯を決定し、当該地方海外協会を通じて仮合格通知を行う。

ロ、地方海外協会は、この仮合格通知に基づき、十五才以上の各人につき無犯罪証明書二通

を警察当局より受け可及的速かに海協連に提出する。

ハ、海協連は、適格世帯について関係書類を添付して、候補者として在日アルゼンチン大使館を通じ、入国許可取得のため同国政府に推せんする。

二、合格者について

イ、アルゼンチン本国から入国許可があり次第、海協連は直ちに当該地方海外協会を通じて、当該仮合格世帯に「合格通知書」を交付する。

ロ、入国許可取得に要する期間は、おおむね四十日間である。

四 講 習

仮合格者に対して、講習を実施するものとする。細部については当該地方海外協会を通じて該当者に通知する。

五 査証と健康診断

乗船に当っては乗船地（神戸、横浜）において、在日アルゼンチン領事の入国査証を受けるが、これに先立ち念のため、二の一のト、チ、と同じ要領で同国大使館指定医師の健康診断を受けることになっている。この結果、さきに提出した日赤病院の証明書記載の事実と異った場合

には、査証を拒否せられることがある。

六 移住あつせん所への入所

合格者は、乗船約八日前に横浜又は神戸移住あつせん所に入所し、所定の講習ならびに手続をしなければならぬ。入所日についてはおつて海協連より、当該地方海外協会を通して通知する。

七 渡 航 費

一、渡航費の全額を海協連より貸付ける（日本の乗船港よりブエノス・アイレス港経由ボサードスまでの船、及び汽車賃）。

二、貸付条件は十九年（据置期間無利子）爾後十九年元利（年利率三分六厘五毛）均等年賦償還とする。

八 所 要 資 金

移住者は、渡航前に最低額として、三十三万五千円を用意しなければならないが、その内訳は

次の通りである。

イ、生活営農資金	二十万円
内	
生活資金	九万円
営農資金の一部	十一万円
ロ、土地代頭金	十万円
ハ、荷物運賃	三万五千円
(フエノスーポサーダス經由現地まで)	

なお生活営農資金の標準額は四十万円であるので、入植後営農資金に不足をきたすときは、移住振興会社の開拓融資要領に基づいて、営農上必要と認められる額の現地融資を受けることが出来る。

備 考

イ、右記営農資金十一万円については、移住振興会社の渡航前融資の対象となる。
ロ、荷物運賃三万五千円については、アルゼンチン国フエノス・アイレス港より、現地までの荷物運賃、トラック借上料の一世帯当りの用意すべき金額であるが、具体的指示は、移住あつせん所にて行う。

八 現地受入勢態

一、土地

(一) 面積

一世帯に一区画（平均三十町歩）を分譲する

(二) 代

土地代金は、一区画毎に移住振興会社が定める。次の標準価格とするが、面積、立地条件により上下一割程度の価格差がある。一区の代金は、概ね次の通りである。

イ、全額一括払の場合

五二一、三〇〇円

ロ、分括払の場合（総額）

六六四、三〇〇円

(三) 分譲方法

分譲区画の設定は、移住振興会社の分譲計画により、移住者の希望を勘案し、現地において最終的に決定される。

(四) 支払方法

イ、一括払の場合は、全額を渡航前に日本国内において移住振興会社に支払う。
ただし地券は現地で引渡される。

ロ、分括払（一〇〇、〇〇〇円前納）の場合は、渡航前に前記金額を日本国内において移住振興社会に支払う。残金は五年据置、三カ年均等年賦にてアルゼンチン国において移住振興会社支店に支払う。

金額払込後に地券が引渡される。

二、移住地内道路及び建設工事

地区内の幹支線道路は、昭和三十五年一月末完了。橋梁工事も二月末で完了した。（冒頭地

図参照）

三、受入施設

移住者が、現地到着後、各自の耕地に住居を建設するまでの間、家族の宿泊用として收容所（三〇米×七米、約六〇坪）及び付属（建物炊事場、便所）二棟が用意されている。

四、公共施設

(一) 教育施設

地区内六号ロッテ（冒頭地図参照）に海協連補助金により校舎が設立され、ミシオーネス州立小学校として発足している。又バスで約一時間行程のフェルト・リコには中学校があり、既入植者の子弟が通っている。

(二) 医療衛生施設

現在、地区内移住振興会社事務所内に診療所があり、日本人二世医師の巡回診察を受けているが、近く海協連補助金により診療所が建設されることになっている。なおプエルト・リコには病院がある。

五、営農指導当地区内にあるアルゼンチン拓殖協同組合試験農場に、当会の指導員一名及び移住振興会社（移住）の社員二名が常駐しており、既入植者の営農指導その他のあつせんに当っている。

六、飲料水施設

流水又は井戸によるものとし、井戸の場合その施設費は自己負担とする。

七、製材施設

入植地近傍に大規模な製材工場がある。

1960年8月1日

アルゼンチンは招く
—ミシオーネス州と日本人—

財団法人 日本海外協会連合会

東京都中央区宝町2の6
電話(代表) 561-6194
振替口座 東京 95755

当会が皆さまに贈る出版物

海外移住（毎月一日、一五日 二回発行）

六カ月 一〇〇〇円（送料共）
一カ年 二〇〇〇円（送料共）

国内における移住の動き、海外における移住者の活躍などを伝えると共に募集の現状と予告、そしてその移住地の実情を解説する当会の機関紙。

移住ハンドブック

定価 一〇〇円（送料共）

第一篇は移住受入国ならびに各移住地の解説と移住するための型態・手続き等を教え、第二篇は移住随筆で移住する者の心構えや心得を説く。

南米卓上地図

定価 一二〇円（送料共）

最新の南米各国の地図をもとに作成されたわが国で最も新らしく、最も詳しく、最も移住者に便利な地図。

明日の国バラグアイ

定価 一〇〇円（送料共）

——その生活と開拓——

自営開拓移住のチャンピオンとなつたバラグアイの国情、生活、移住地の様子などを、移住する人の身になつてやさしくかいた本。
写真約四十枚。



地方海外協会一覽

日本海外協会連合会

ア・ル・エ・ン・チニハ招く

議 議
企 長 報

9 11 9 17 8 12
7 7 6 7 4 10 8

334465

N

青森県海外協

岩手県海外協

宮城県海外協

秋田県海外協

山形県海外協

福島県海外協

茨城県海外協

栃木県海外協

埼玉県海外協

群馬県海外協

千葉県海外協

東京都海外協

神奈川県海外協

新潟県海外協

富山県海外協

石川県海外協

山梨県海外協

信濃県海外協

岐阜県海外協

静岡県海外協

愛知県海外協

三重県海外協

福井県海外協

県庁開拓課

庁政課

庁農地開拓課

庁府農林会館内
区法丹坂町10

庁管理課

庁外務課

拓課

拓課

拓課

拓課

拓課

拓課

拓課

拓課

拓課

拓課

拓課

拓課

拓課

拓課

拓課

貸出期間票

所属	帯出者氏名	貸出日	返子	却日	返却日
			定		

借出期間は首ら出反勿

自營開拓移住のオヤンピオンとなつたコラダグフイの日本産私
住地の様子などを、移住する人の身になつてやさしくかいた本。
写真約四十枚。

伊藤伊製



地方海外協会一覽

31

12

- 青森県海外協
- 岩手県海外協
- 宮城県海外協
- 秋田県海外協
- 山形県海外協
- 福島県海外移
- 茨城県海外
- 栃木県海外

日本海外協会連合会

アレンチニハボク

詞 企 長 瀬

7/11 8/17 8/12
7/7 6 7/10 8

334465
N.

- 埼玉県国連夕
- 群馬県海夕
- 千葉県海夕
- 東京都海夕
- 神奈川県海夕
- 新潟県海夕
- 富山県海外移
- 石川県海夕
- 山梨県海夕
- 信濃海夕
- 岐阜県海夕
- 静岡県海外
- 愛知県海外
- 三重県海外協会
- 福井県海外協会

- 庁農政課
- 庁農地開拓課
- 府農林会館内
区法内坂町10)
- 庁管理課
- 庁外務課

- 石課
- 拓課
- 事課

- 直課
- 直課
- 拓課
- 生課
- 拓課
- 拓課
- 拓課
- 拓課
- 拓課
- 拓課
- 拓課
- 拓課
- 拓課
- 拓課
- 拓課

県庁開拓課

